二次元ドリームノベルズ

18 未満

サンダークラップス！ リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

ピースキーパー

羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章 サンダークラップス水着回！ スイムスーツイシュー 004
第二章 エクストリーム！ 020
第三章 スターサンダーの秘密が明らかに！ オリジン・リビールド 044
第四章 牝奴隷と巨獣姦ショー 068
第五章 牝奴隷肛悦レース 096
第六章 牝奴隷に咲く淫らな花園 110
第七章 黒い宇宙 ブラックマルチバース 139

ローズデバイス
Rose device

「サンダークラップス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷を負い、体内にナノマシンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着して闘う。

スターサンダー Star thunder

スーパーヒーローチーム
「サンダークラップス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

オセロット
Ocelot

「サンダークラップス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な美女。
南米の自然の精霊たちに認められたシャーマンで、精霊の力を宿してジャガーの獣人に変身して魔法を使う。

フレア
Flare

「サンダークラップス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオーダーに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

Attention

バドリス・オル

スターサンダーの異母兄。とある事情で妹を恨んでおり、復讐するために地球へやってきた。

サンダークラップス！リボーン ピースキーパー
CHARACTERS

目次

第一章　サンダークラップス水着回！（スイムスーツショー）
第二章　エクストリーム！
第三章　スターサンダーの秘密が明らかに！（オリジン・コンセールド）
第四章　牝奴隷と巨獣祭ショー
第五章　牝奴隷肛悦レース
第六章　牝奴隷に咲く淫らな花園
第七章　黒い宇宙（ブラックアース・パーク）

第一章　サンダークラップス水着回！

（スイムスーツイシュー）

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてゾビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンD．C．へ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身で宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、宇宙からもどってくると集まった記者たちへほがらかに笑って、僕は子供のころから〝超能力（スーパー・オフビート）っぱずれ〟と呼ばれていた、と語った。

それからもスーパーオフビートは鮮やかな赤いコスチュームをまとい、赤いケープをひるがえして、倒れかかったビルを持ち上げ、墜落する飛行機を支え、海底に沈んだ潜水艇を引き揚げた。

さらに多数の犯罪者と闘い、ギャングが放った銃弾の雨も砲弾も胸板で跳ね返し、テロリストが仕掛けた猛火にも冷凍にも耐えて、悪党を逮捕して法の裁きのもとへ送った。

最初に世に現れた超人スーパーオフビートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれついての超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物、はては異星人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちのある者は平凡に暮らした。

ある者は特別な能力を悪用した。

そして多くのオフビートたちが、始祖スーパーオフビートにならって、犯罪や事故から人々を救うスーパーヒーローとして活躍している。

鈴堂麟（りんどうれい）。日向燦（ひなたがまたたら）。柳イザベラ美巣（やなぎ）。北原静子（きたはらしずこ）。四人も各々異なる理由で、様々な超能力を得たオフビート。

麟はスターサンダー。

燦はフレア。

美巣はオセロット。

静子はローズデバイス。

と、ヒーローネームを名乗り、スターサンダーをリーダーとしてサンダークラップスというヒーローチームを結成している。

世にデビューしてから間もないが、人気の高い新進気鋭のチームだ。

とはいえスーパーヒーローにも普段の生活はある。正義と平和を護るためには、ときに肉体と精神をくつろがせることも必要だ。

今日は昼間から、四人そろって練馬区内にある スーパー銭湯に来ていた。西武池袋線沿線に住居兼秘密基地を置くサンダークラップスにとっては、手近にあるありがたいリラックスの場所。四人の間ではサンダークラップスリラクゼーション基地と勝手に呼んでいる。

スーパー銭湯には男性用と女性用の二つの大浴場の他に、男女共用の屋内温水プールがある。プールでは水着の着用がルールで、サンダークラップスの四人も女性用着替え室の互いに姿が見えない位置で着替えていた。

今日はリーダーの麟の提案で、別々に買った水着をプールで披露し合う計画だ。

大きなゼームタオルで肌体を隠した四人がプールサイドに集まると、互いを見つめ合い、探り合い、牽制する。

わずかな間の後、広い屋内プールに高々と声が反響した。平日の昼間なのでまばらな客たちが顔を向けてくる。

「ベルが一番目ッ！」

柳イザベラ美巣は、チーム内ではミドルネームの愛称のベルで呼ばれている。ベルは南アメリカで生まれ育った日系人。短い髪に縁どられた日焼けした顔は、ネコ科の猛獣を思わせる俊敏さと愛嬌が同居している。

チャリティイベントに出演したスーパーヒーローが、マントを バサリと背後へ跳ね上げるように、ベルが右手でタオルを派手にはだけた。

現れたベルの日焼けした身体は、スピードを競うアスリートのようにしなやかで力強い。胸と尻は巨乳豊臀というにはやや小さいが、引きしまった肉体と美しいバランスを構成した。

ジャングルで育った発剌たる健康美の肉体を飾るのは、肩紐のないチューブトップのビキニ水着。

普段から動植物をプリントした服を好むベルは、ビキニも明るい黄色の地にニューギニア島に生息する極楽鳥をちりばめている。

「どう、どう、この極楽鳥の模様？　あちこち探して見つけたんだよ。ほらほらほらッ！」

ベルは両腕を後頭部にまわして、胸をつんと突き出し、腰を振り、サンバのリズムでジャングルの鳥を盛大に踊らせた。存在しない陽気な音楽が聞こえそうな女体の躍動に乗せられて、プールの男たちから、おおっ、と歓声が上がる。

「さあああっ、次にお披露目するのは燦かな！　静かな！」

ベルの煽りを受けて、燦と静子は顔を見合わせ、アイコンタクトして、同時にタオルを広げた。

日向燦は二十歳前後に見える。短い髪に、凛とした美貌。サンダークラップスのなかでは一番の長身で、女の魅力とたくましさを兼ね備えた肉体に、二番目に豊かな（たわわな）バストサイズを誇っている。

北原静子は十代後半だが、小柄で華奢な身体つき。可憐で愛らしい美貌にも、肉体にも、まだ少女の面影を残している。胸のふくらみはまだ小さく、尻も熟すにはまだ遠い。

対照的な容貌の燦と静子だが、水着は同じデザインだった。純白のワンピース水着。下半身はローレッグで、二人のサイズの違う尻と下腹部をしっかりと保持している。

水着になってニッコリと微笑み合う燦と静子をながめる男たちが、ほう……と吐息をつく。

ほのぼのした空気を引き裂いて、ベルの怒声がほとばしった。

「二人いっしょに水着を買いに行ったなッ！　別々に買うと約束したのにー」

燦と静子がタイミングを合わせたように顔を左右に振った。

「いやあ、それはたまたま水着売り場で静子と出会っちゃって」

「そうなんです。なんとなくおそろいになっちゃって」

「卑怯だ！　それでも」

ベルが周囲に聞こえないように声を潜めて、二人に顔を近づける。

「正義のヒーローか」

静子も小さい声で言い返した。
「傷大なヒーロー、ミスター・アンフェアは言っています。『ヒーローが護るのは正義という言葉でなく人間だ。人命を護るためにはどんな卑怯なことでもする』と」
ミスター・アンフェアは日本の最も初期に現れたスーパーヒーローだ。誘拐・拉致・監禁・人質を取っての立てこもり等の事件において、縦横無尽の策略で犯人を翻弄して、数知れない被害者を救出してきた。
ベルが芝居がかった困惑顔で、大げさに肩をすくめて見せる。
「純情可憐だった静が、いつの間にか闇落ちしてる。こんなことなら、ボクが持ってる本場のブラジリアンビキニを燦に渡せばよかったよ。燦の立派なプロポーションならよく似合うから」
ベルの瞳が輝くのを見て、燦は苦笑する。
「渡されても、そういうのは絶対に着ないから」
「それじゃあ、麗ちゃんの水着を見せてもらおう。きっとすごいよう。18禁かも」
「麗は常識人だよ。ちゃんと公共のプールの常識をわきまえている」
ベルと燦の言葉を声援にして、麗は乳雀が美しい尾羽を広げるようにタオルを持つ両手を開いた。
鈴堂麗は二十代後半。長い黒髪を頭の上にまとめて、大人らしい端正で脱明な美貌を少し上気させている。
肉体は色白で、むっちりと熟していた。豊満な乳房は四人の中では最も大きく、自重でやや位置が下がっているのが艶めかしい。ウエストのゆるやかなくびれの下には、みっちりと肉のつまった尻が実っている。さらに太腿もむちむちだ。
大人の女の魅力を凝縮したような女体を包んでいるのは、紺色のスクール水着。ご丁寧に胸の白い布には『匿名』とサインペンで手書きしてある。
目の前で見ているチームメイトの三人だけでなく、プール中の男女が唖然として声を失った。豊満な乳肉も尻肉もきちんと水着の厚手の生地の内側に納まり、窮屈な感じはしない。既製品のスクール水着を無理やり着込んでいるのではなく、わざわざ自分の肉体に合わせて製作したものだとわかる。
数秒後に、燦が口に出した。
「ど、どうしてスクール水着!?　大人はスクール水着を着ないことは、ちゃんと知ってるだろう」
麗はかなりうっとりした表情に、艶然と笑みを浮かべた。
「もちろん、知っているわ。知識としてね。でも地球文化の研究者として、知識だけでなく、スクール水着を実体験しておきたかったのよ。これこそがフィールドワークだわ」
学者らしい言葉を口にしながら、燦たち三人が見つめる麗の瞳はねっとり潤んで、小鼻が少し広がっている。多数の人々の前でスクール水着姿を披露することに、歓喜を得ているのは明らかだ。
「さあ、プールを楽しみましょう！」
麗は手にしたタオルを近くの壁のバーにかけると、ランウェイを闊歩するモデルのごとく颯爽とプールサイドを横切り、温水プールへと近づいていく。男女の視線の集中放火を浴びながら、優雅な動作で温水に入った。
「麗らしいといえば麗らしいね。わたしたちの中で一番常識を知っているのは麗だけど、平気で常識を無視する」
「あたしは常識的な人生を送ってきたとは言えないから、常識にはあまり自信がないです」
「それを言ったら、ボクたち四人とも普通の人生を送っていないよ。そもそも常識のある人間は」
三人は一段と声を低くして、同じことを言い合った。
「スーパーヒーローにはならない」
笑い合う三人に、麗が温水の中から手を振った。
「早く遊びましょう。いつ呼び出されるのか、わからないんだから！」

☆

ひとしきり遊んだプールから女性用大浴場へ移った四人は、水着を脱ぎ、身体を洗って、中庭に面した天然温泉露天風呂にそろって浸った。
緑の庭木にかこまれた広い浴槽は、茶色い湯をなみなみとたたえている。地下一キロ以上の深さから汲み上げたナトリウム・塩化物強塩温泉で、大昔に地中に閉じこめられた海水に様々な成分が溶け込んだもの。
麗は頭にたたんだタオルを乗せて、茶色い湯面に豊かな乳房を二つの島のように浮かせ、温泉の中に白い裸身を長々と伸ばした。弛緩した美貌から、ゆるゆるっと喜声があふれる。
「はあぁ～～ああ。極楽極楽～～～う。はあ、ビバノンノン」
思い思いに湯船でくつろぐ三人が同時に言った。
「おっさんくさいなあ！」
「びばのんのん？」
「びばのんのん。てなんの呪文？」
麗はゆるんだ顔に自信をたっぷり浮かべる。
「日本では、温泉に入ったら、極楽極楽ビバノンノンと言うのが伝統なのよ」
「えっ、そうなの？」
「あたしは聞いたことがない気がするんですけど……」
「ボクは南米育ちだし」
やはり日本の伝統と言われると、少々自信がない。地球の文化研究と称して趣味に走った雑学を調べている麗が一番の物知りだ。
「まあまあ。細かいことは気にしないで、のんびりリラックスしましょう」
しかし、そうはいかなかった。
麗、ベル、燦の耳の穴に入れている通信機から、同時に愛らしい少女の声が聞こえた。静子だけは特別な脳が直接電波を受信して、声に変換する。
「『小電光（リトルボルト）』です。警察から救援要請が来ました。緊急度、重要度、ともにSクラスです。暴力団同士の抗争で、敵対する敵人のオフピート組員が能力を使って、あたりかまわず暴れています」

リトルボルトは、サンダークラップスの基地を管理するコンピューターに与えた人格だ。
「場所はわたしがナビゲートします。急いでください！」
四人はうなずき合うこともせず、潜船からげバッと立ち上がり、ペタペタと音を立てる急ぎ足で大浴場を横切り、他の客を驚かせる猛烈なスピードで私服を着た。外の駐車場に停めた白いワゴン車の荷物室のドアを開けて、全員が座席ではなく荷台に乗りこむ。
麟は指先で首に巻いたチョーカーに触れた。異星の技術が発動して、赤いスーツとスカート、ブラジャーとショーツ、靴下とパンプスが微粒子に分解されて、チョーカーに吸収された。
入れ替わりにチョーカーから新たな物質が噴出して、一糸まとわぬ麟の裸体の表面にコーティングされる。物質は瞬時に凝固して、豊満な女体に薄く密着するスターサンダーのヒーローコスチュームになった。
スターサンダーのコスチュームは、真紅のレオタード型のボディスーツ。アクセントとして青い稲妻の模様が走っている。身体の前面は、胸の中心からへその下まで切れこみがあり、豊かな巨乳の半分となめらかな腹の肌をあらわにする。
両脚には膝下までの赤いブーツ。
顔には同じ色のアイマスク。
やたらと露出の多いレオタードとロングブーツだけに見えるが、実際には素肌が覗く腹や太腿も透明な材質で包まれている。
とにかく巨乳となだらかな曲線を描くウエスト、大きく張った尻。むっちりした脚線が余すところなく表れたコスチュームは、女性スーパーヒーロー専門のパパラッチ動画サイトの再生回数ベストテンの常連だ。一部からは教育に悪いとクレームも出ている。
どちらに聞しても、麟＝スターサンダー本人はまったく気にせずに、見事な肉体を世間に見せつけていた。
静子はテキパキと白いワンピースを脱ぐと、華奢な身体に着た黒いインナースーツ姿になる。車内の隅に置いた黒いアタッシュケースのロックを、脳から発した電波で解錠した。中から多数の金属片が飛び出し、静子の身体の周囲で結合して、頭頂部からつま先まで包みこむ。
ほんの数秒で、金属片は静子を中に収める八イテクの装甲（アーマー）と化した。
アーマーを装着した静子はローズデバイスとなる。
エメラルドグリーンに輝くアーマーは、金属でありながら優美な大人のボディラインを形作った。中の人の静子よりも長身で、バストもヒップも豊かなプロポーションを誇る金属の美女だ。正体を知るサンダークラップスのチームメイトと一部のヒーロー以外は、アーマーの外見からローズデバイスを大人の女だと信じている。
ベルは口から獣の咆哮（ほうこう）に似た呪文をうなった。光沢のある八チドリをプリントしたTシャツとデニムのショートパンツとサンダルが一瞬で消失して、全裸の肉体が別のものに変貌する。
顔はネコ科の猛獣に近くなり、短髪が伸びて長いたてがみになる。頭の上からは三角形の獣の耳がピンッと立った。全身には獣の体毛が生えて、黄色い地に黒い斑点模様が浮かぶ豹柄になる。尻の上からは黄と黒の縞模様の長いしっぽが垂れた。
ジャガーを思わせる獣人の肉体と化したベルは、オゼロットと名乗る。
燦だけは普通に白いシャツとダークブルーのパンツを脱ぎ、自分のかたわらに置いたコスチュームを着た。ただし普通の人間をはるかに超える高速で。
燦が着替えたのは、袖のない白いミニスカートのワンピース。正確には白いボディスーツの腰に短いスカートがついている。高く盛り上がる胸には黄色い炎のエンブレムが描かれている。世間ではよく白いチアリーダーとも呼ばれるコスチュームだ。
チアリーダーとの違いは、背中に腰までの長さの白いマントがあり、両脚にロングブーツを履いていること。
フレア、が燦のヒーローネーム。
車外に降りたフレアは、両腕でスターサンダーの身体をお姫様抱っこする。
「行くよ」
「ＯＫ」
フレアは抱えるスターサンダーの体重など存在しないように、背中の白いケープをひるがえして空中に飛び上がった。
ローズデバイスの背中には、オゼロットがしがみつく。
「よーし。ローズ、発進！」
「しっかりとつかまってください」
ローズデバイスのアーマーの両足の裏からジェットが噴射して、緑色に輝く金属のボディが垂直に飛翔する。オゼロットはコアラさながらにしがみついている。
サンダークラップスのメンバーのうち、飛行能力を持つのはフレアとローズデバイスの二人だけ。緊急の場合は、どうしてもこういう移動になった。青空を高速で移動する四人の周囲には、ローズデバイスが形成した流線型の透明なバリアがある。おかげで直接突風を浴びることなく、スターサンダーとオゼロットも呼吸に困らない。
サンダークラップスは事件現場へと、高速で飛んだ。

☆

空から事件現場に降り立ったサンダークラップスの四人は、そろって目を丸くして、口をポカーンと開いて、奇怪な光景を前に棒立ちになった。
駆けつける途中に音声で聞いた資料によれば、関東でも有数の武闘派暴力団と、関西から進出して来た武闘派暴力団が激突して、双方が擁するオフビートヤクザが殺し合っているというのだ。
だが目の前では、両腕がガトリング銃になった巨漢と、背中から燃える炎の翼を広げた大男がしっかりと抱き合い、互いの健闘を讃え合っている。鋭い金属の爪を生やした四本腕の痩身の男と、先端が牙の生えた口になった長い髪の束をグネグネと動かしている女が、扇を組んで爽やかな歌をデュエットしている。見るからに凶暴なミュータント犬の群れを連れた男が、見るからに獰猛なサイボーグ猿の群れを率いる男が、缶ビールを応つけて乾杯している。
オフビートだけでなく、超能力はないが屈い悪名はある暴力団員たちも、長年の友人たちのパーティーのように、陽気に笑い合い、下手な歌を合唱し、手拍子をパックに乱舞している。そのまわりの路面には、ドスや拳銃や釘バットが大量に打ち捨てられていた。あまりに不思議な光景に、警官たちもどうしていいのかわからず、遠巻きにながめている。
「これ、なに？」
と、フレアが口にした。

「謎です」
と、ローズデバイスのエメラルドグリーンのアーマーが首をかしげた。
「謎だね」
と、オゼロットが鼻をクンクンと動かした。妖しいオカルトな匂いはないようだ。
「これはもしかして……だとしたら、とんでもないことだわ」
スターサンダーだけは美貌をけわしく引きつらせた。

第二章　エクストリーム！

「はい、注目！　このあいだの暴力団抗争事件について、わたくし錦堂麗から重大な見解を述べたいと思います！」

麗は金属製の指し棒を伸ばして、背後にある会議室用ホワイトボードサイズのモニターを軽く叩いた。サンダークラップス基地内の情報室に、硬い音が鳴る。

基地といっても、西武池袋線沿線に建つ大きな日本家屋だ。売りに出ていた旧家の御屋敷を、麗が買い取り、スーパーヒーローチームの住居兼基地として内部を改装したもの。もちろん周囲の住民には、住んでいる四人がサンダークラップスとは知られていない。

情報室と呼んでいる部屋も、かつては大勢の親戚が集まって宴会をした畳敷きの広い座間に、コンピューターや様々な機器を設置した空間だ。

室内には、サンダークラップスの四人が普段着で集まっていた。

モニターの右サイドには麗が立ち、左サイドには静子が立っている。

麗は鮮やかな桜色のワンピースの部屋着。

静子は清楚な淡い水色のワンピース。

二人の前には長方形のちゃぶ台があり、両側に置いたクッションに燦とベルが座っていた。

燦は動きやすさ重視の半袖の藍色のトレーニングシャツと、白いハーフパンツ。

ベルは極彩色の熱帯のフルーツを描いた派手なTシャツに、デニムのショートパンツ。

今日は、二大武闘派暴力団抗争途中で宴会化事変から三日後。逮捕された暴力団員たちはかつてないほど素直に警察の取り調べに応じているという。

「暴力団の処遇は警察の皆さんにまかせるわ。わたくしが問題にしているのは、どうして今にも殺し合おうとしていた人々が、急に大の仲良しになったのかよ。わたくしには思い至ったことがある。それを説明する前に、ここ二か月のわたくしたちの活動を考えてほしいの。事故や火事や自然災害での救助活動の回数は変化していないけれど、犯罪で出動した件数は少なくないかしら」

燦とベルが顔を見合わせ、燦は首をかしげて答えた。

「そうだ。言われてみれば、このひと月の間に捕まえたのは、恐竜みたいな戦闘マシンで銀行を襲った強盗団『恐るべき貪るもの（グイノディヴァヲース）』と」

ベルも記憶を掘り返す。

「東京に進出しようとした南アメリカの犯罪組織『大蛇結社（アナコンダカルテル）』の構成員だけ。あのときは渋谷のラブホテル街で、懐かしの『山羊（チュパカブラ）しゃぶり』に会うとは思わなかったよ」

ベル以外の三人が、ラブホテル街に湧いた南アメリカの怪物の群れのグロテスクな姿を思い出して、げんなりした表情になる。南米からやってきたギャングたちはいっせいに魔術薬を飲んで、チュパカブラに変身したのだ。

静子は手でモニターの数字を示して告げた。

「あなたたちだけではありません。日本中のスーパーヒーローが公表している犯罪者との闘いの数が激減しています。ヒーローだけでなく、警察の記録でも同様です。どう考えてもこの減少の仕方は異常です」

麗は頭からチュパカブラを振り払って、真撃な顔つきでモニターを見つめる。

「以前から感じていた犯罪の減少と三日前の暴力団パーティー事件が合わさって、わたくしはある不安を抱いた。それで静ちゃんに依頼して、日本国内だけでなく世界の犯罪に関する資料を集めてもらったわ」

「あたしだけでなく、リトルボルトにも手伝ってもらいました」

「はーい、これです」

モニターの前に身長十五センチの愛らしい少女の立体映像が現れて、ふわふわと浮かびながら、両手を広げて背後に並ぶ数字を示した。サンダークラップス基地を管理するコンピューターのアバターは、麗の趣味で人気アイドルグループのチャイナドレス風がわいいステージ衣装を着ている。

「世界各国で犯罪の発生件数が減っています。ひったくりや万引きや痴漢といった突発的なものから、プロの常習者や犯罪組織やテロリストの犯行まで、同じように減りつづけているのです」

コンピューターの後を継いで、静子が語る。

「減っているのは犯罪だけではありません。世界中の内戦や民族紛争が鎮静化しています。政治的な理由ではなく、兵士たちが自主的に戦闘をやめています」

リトルボルトが両手をダンスの振り付けのようにはためかせると、モニターに写真が何枚も表示された。いずれも兵士たちが銃やロケット砲や戦車を捨てて、握手し、抱き合い、ひとつの大鍋から料理を分け合い、パーベキューパーティーをしている。兵士たちの柔和で楽しげな笑顔に、四人とも見覚えがあった。ほんの三日前に見たばかりだ。

「このあいだの暴力団みたいだ」

「感動的な光景なんだけど、みんな気持ち悪いくらいにこやかね」

「あたしもとても不自然なものを感じます」

麗のおっとりした美貌が、苦い経験を奥歯で噛み砕いた顔になる。

「このデータと映像を目にして、わたくしは確信したわ。恐ろしいやつらが地球に干渉しているのよ。その名は」

麗は眉根を寄せて、声を高くした。

「『宇宙亜（コズミック）和維持者（ピースキーパー）』よ！」

「え？」

「なんだって？」

聞いていた燦とベルがともに、顔全体にクエスチョンマークを色濃く浮かべる。静子だけは事前に聞かされていたが、やはりそのときにはナノマシン製の脳が疑問でいっぱいになった。どれほどおどろおどろしい名前が出るかと思ったら、まるで国際的なボランティア団体みたいな名前。実際に似たような名前の団体が存在する気がして、静子はつい脳内のデータベースを検索したものだ。

「コズミックピースキーパーを地球人が知らないのは当然だわ。天の川銀河、つまり地球がある銀河系で暗躍する狂った宇宙のカルト組織よ」

「銀河だって！」

「宇宙人の侵略ってこと!?」

燦とベルは宇宙人の仕業と聞いて驚きはしたが、嘘だとは考えなかった。なぜなら目の前に。

麗は真撃な表情で語った。

「わたくしの故郷の惑星が属する第七次星間条約同盟の銀河領域では、コズミックピースキーパーは発見次第、問答無用で捕縛して、刑務所に収監する第一級懲罰対象に指定されているわ。他の多くの銀河領域でも、同様の指定を受けているのよ」

鈴賞麗は別の恒星系の惑星から地球に来た異星人。正確には異星人と地球人のハーフと、チームメイトに明かしていた。燦たち三人は、麗が地球まで乗ってきた円盤型の宇宙船に搭乗して月の近くまで行っているので、疑ってはいない。空飛ぶ円盤は、いつもは太平洋側の日本近海の水中に隠してあった。

ただ故郷の惑星と恒星の名称も、その位置も、チームメイトだけでなく地球の誰にも教えていない。故郷の法律で禁止されている、と仲間たちには言ってある。

「そこまで危険視されているなんて、コズミックピースキーパーは銀河の人々にどんな酷いことをしたの？　平和を護るという大義名分で戦争を仕掛けたとか」

燦の質問に、麗は首を横に振った。

「コズミックピースキーパーはわたくしの故郷の人々にも、他の宇宙航行種族にも、なにもしていないわ。それどころか宇宙空間の事故や惑星規模の大災害が起きると、分け隔てなく無償で救助活動をして、長い間感謝と尊敬をされていた」

「ボランティア活動の裏で、悪事をしていたんだ」

「コズミックピースキーパーは本当に善意の団体よ。だからこそ銀河の人々は長い間、彼らがしてきたことに気づかなかった。所属する人たちは正しいことをしていると確信して、まだ恒星間を移動するテクノロジーを持たない文明種族が住む惑星に、独自に開発したウイルスを流行させていた。

銀河では『腐った平和ウイルス（ロッテンピース）』と呼ばれているウイルスは、知的種族から欲望を失わせる。罹患した種族からは、最初に強い欲望の発露である犯罪や戦争がなくなるわ」

「それはいいことじゃないかな。実際に世界中が平和になっているんだから」

「知らない間に脳改造されて与えられた平和が、正しいとは思えないわ。ロッテンピースウイルスは時間をかけて、人々から探求心や好奇心、向上心を奪い、他者に対する愛情も失わせる。なにかを成しとげる意思がなくなる。たいせつなものを守る気持ちも失われる。学問の発見も、技術の開発も、文化の発展もない。すべてが停滞して、維持すらできなくなり、やがて惑星の文明は崩壊してしまうわ。

コズミックピースキーパーの目的は、宇宙へ進出する可能性のある文明を破壊して、宇宙を航行する種族を増やさないこと。それが宇宙の平和を維持するための正義だと考えているのよ。

リトルボルトが今、暴力団の皆さんの身体から採取したサンプルを分析している。明日には結果が出るわ。ロッテンピースウイルスを発見したら、わたくしの故郷に連絡して、ウイルスを殲滅（せんめつ）する医療宇宙船を派遣してもらう」

ベルが両手を叩いて、軽快なリズムを刻んだ。

「チームメイトに宇宙人がいてよかった。危うく地球人が退化するところだったよ。このことはジャスティスサーカスに教えてる？」

「まだよ。結果が出るまでは」

麗の言葉を、突然の甲高い悲鳴がさえぎった。となりに立つ静子の声ではない。前に座る燦でもベルでもなかった。

リトルボルトが叫ぶ。

「ダメッ！」

その言葉を残して、立体映像が消失した。モニターの映像も消えた。四人の周囲のコンピューターがいっせいに沈黙した。

基地のコンピューターに常時つながっている静子が声をあげる。

「基地の電源が落ちました！　予備電源も復旧システムも作動してない。これはハッキングではありません。システムを物理的に破壊されています！　屋敷への侵入者の仕業です」

「まさか！　気づかれずに、うちに入ることなんて不可能よ」

サンダークラップス基地はもともと古い日本家屋で、今も外見は麗が購入する前から変わっていないが、厳重な監視装置が張りめぐらせてある。かつて『パラサイトクライシス』事件で、敵にテレポートで侵入されたことはあるが、外から強引に押し入られたことはなかった。

静子はさらに激しい頭痛がするかのように両手で頭を押さえる。

「屋敷の外との通信ができない！　屋敷が完全に外と遮断されてる！　あたしの脳になにも入ってこないっ！」

静子は幼いころに、優秀な科学者である父親の実験の事故に巻きこまれて、脳と神経系に進行性の損傷を受けた。脳と神経がじょじょに崩壊していく娘を護るために、父親は開発中の特殊なナノマシンを娘に注入して、神経系の機能を代替させた。静子の人格と記憶はナノマシンが形作る機械の脳に移され、長いリハビリを経て普通の人間として生活できるようになったのだ。

やがて静子は自分が普通ではないと気づいた。ナノマシンの脳は、人間が普通に生きていくのに必要な能力をはるかに超えるキャパシティがあった。静子は膨大な情報網と常時接続して、情報を取捨選択整理してデータとして記憶している。普段は特に意識していないが、突然情報の大海から切り離されて、まるで五感の一部を失ったようだ。

「静子、大丈夫なの？」

「攻撃を受けてるのか？」

麗と燦にたずねられて、静子は大きく深呼吸をしてから答えた。

「身体に被害はありません。ただ情報が脳に全然入って来ないと、あまりに静かでびっくりです。今、屋敷の周囲に特殊なシールドが形成されているはずです。シールドを消さないかぎり、ロッテンピースウイルスの情報を外に送るのは不可能です」

「わかったわ。とにかくサンダークラップス出動よ！」

麗は指先でチョーカーに触れ、スターサンダーのコスチュームをまとった。

ベルが獣の咆哮をあげて、オゼロットへ変貌した。

燦もフレアのコスチュームに着替えた。

静子もアーマーを装着してローズデバイスになり、即座にアーマーの探査装置で索敵を開始する。

「侵入者の位置を把握しました。人数は二人。今は」

ローズデバイスの言葉に、反響する男たちの悲鳴が重なった。あきらかに機械で増幅した咆哮だ。

「我らは『極限の襲撃者』だ！　サンダークラップス、出てこい！」
「俺たちはおまえらの家の中庭で待っているぞ！」
「出てきて、正々堂々と俺たちと闘え！」
三人分の声がきれいに八モって、空気をビリビリと震動させるように響いた。
「我らはサンダークラップスに挑戦するッ！」
スターサンダーは渋い顔になる。
「この大声では、ご近所中に聞こえているわね。いよいよ引越しかしら」
オセロットのネコ科の顔にも、うんざりした表情が浮かぶ。
「この家も、ここの町も、気に入ってるのに。ったく、いるんだよねえ。ヒーローに喧嘩を売って、名を上げようっていう目立ちたがり屋が。そういうやつにかぎってヘッポコなんだよ」
「まあ、犯罪をされて捕まえるより、直接来てくれたほうがありがたいわ。わたくしたちの基地を探り当てて、セキュリティを突破できる能力があるのだから、油断は禁物よ。ローズ、相手はどうしている？」
「三人とも中庭から動いていません。自分たちで言った通り、じっとしています」
アーマーの探査システムをフルに使いながら、四人は情報室を出ようとした。
そのとき、四人の背後で強大な破壊音が轟き、大重量が壁に激突する震動が走る。
最も速く反応したのは、通常の人間を超える反射神経を持つフレアだった。回れ右したフレアの目に映ったもの。それは。
巨大な雪だるま。
天井と屋根に大穴が開き、青空が覗いている。流れる白い雲がチラチラと微妙にぶれて見えるのは、ローズデバイスが言った屋敷を包むシールドのせいだろうか。
壊された天井と床の間に、雪だるまが鎮座していた。
白い大きな球体の上に乗った少し小さな球体の前面に、二つの黒い円と一本の黒い横線が描かれて顔になっている。まさに標準的なデザインの雪だるまにほかならないが、サイズが異様だ。頭のてっぺんは破壊した天井の位置まで達している。
そして形こそ雪だるまだが、なめらかな表面は雪ではなく、なにか白い材質だ。
一瞬で状況を見て取ったフレアは量を跳り、砲弾のごとく巨大雪だるまへ向かって飛んだ。チームで最も素早く、頑強な肉体を持つ自分が、相手の力量を計る役目にふさわしいと考えての行動だ。
だが、裏目に出てしまった。
雪だるまの表面から白いものが次々と剥がれて、フレアへ向かって飛んでくる。フレアの視覚は、高速で飛来するものの正体を瞬時に見破った。
（紙!?）
何十枚もの正方形の白い紙が、鳥の群れのように自分に押し寄せてくる。紙など、鉄骨を捻じ曲げられる自分の敵ではない、と判断してしまった。
「ただの紙じゃない！」
と、オセロットの叫びが背後から聞こえたときには遅かった。紙の表面にいくつもの文字が浮かび上がり、フレアの全身に貼りついてくる。両手で顔に貼りつく紙をつかみ、強引に破ろうとしたがびくともしない。顔から剥がすこともできない。
薄い紙にふさがれた口から、くぐもったうめき声があふれる。
「んんんっ！」
（しまった！　魔法だ！）
フレアのように強靭な肉体と強大な腕力を頼りに活躍するスーパーヒーローにとって、魔法は最大の敵だ。今もぺらぺらの紙一枚が、表面に記された呪文の効果で物理的な力をまったく受けつけなくなっている。
魔法の紙は猛烈なスピードで後ろからフレアの身体に貼りつき、たちまち全身が紙に埋もれて、紙製ミイラという状態と化して、地面に落下した。
同じことは機械に頼るヒーローにも言える。フレアにわずかに遅れて、ローズデバイスもアーマーの自動的な反応でふりかえった。しかし武器を作動させる前に、アーマーが殺到した呪文付きの紙の束に覆われ、たちまち白い塊にされて棒のように倒れた。
「ちくしょう！」
オセロットが呻いて、両手を前に突き出した。腕の周囲に次々に八チドリの群れが現れる。羽毛を鮮やかな金属光沢に輝かせる小さな鳥たちは、肉体を持つ存在ではなく、オセロットが召喚した南アメリカの精霊だ。
ベルは少女のときに、南アメリカ大陸の精霊の王たちによって特別なシャーマンとして選ばれた。世界中のどこにいても、南米の動植物の精霊を呼び、操ることができる。
オセロットとスターサンダーに迫る白い紙の束に、飛ぶ宝石と呼ばれる極彩色のハチドリたちがいっせいに突っこんでいく。フレアの剛腕もローズデバイスの武器も受けつけなかった紙が、小鳥のするどい嘴（くちばし）で貫かれ、いともあっさりと破られる。呪文の真ん中に穴を開けられて、魔力の源を失った紙がはらはらと雪に落ちた。
紙を破った精霊たちは、ハチドリの特技であるホバリング飛行で二人の前にとどまり、雪だるまの表面から次々と剥がれてやってくる大量の紙の迎撃をつづける。オセロット、スターサンダーと巨大雪だるまの間は、精霊の鳥と魔法の紙が空中戦をくりひろげる戦場と化した。その下の雪では、紙にパッケージされたフレアとローズデバイスが倒れたまま動かない。
スターサンダーはフレアたちを助ける機会をうかがうが、苛烈な空中戦の中に入れそうにない。
（それにエクストリームストライカーズと名乗ったのは三人。雪だるまの他に、あと二人がどこかにいるはずだわ。はっ！）
背後に動きの気配を感じた。
「そこっ！」
振り向きざま、両手から二筋の青白い電光が獲物を追う蛇のように空中を走り、廊下に立つものを撃った。感電死はしないが、普通の人間ならスタンガンを当てられたように倒れて、動けなくなるはずだ。
だが廊下に立つ影は、倒れずに直立したまま。
なぜなら、人ではなく、チューリップだから。
チューリップなのに、高さは大人の男の背丈ほど。竹のように太い幹に支えられた花は、毒々しいまでに真紅で、やはり大人の頭ほどのサイズがある。
もちろん一瞬前まで、廊下にこんな怪物しみたチューリップは生えていなかった。

「植物を操るオフビートがいる⁉」
「うわ、なんだ！」
オゼロットの叫びが聞こえた。あわてて体を振り返ると、オゼロットの肩から上が、鮮やかな黄色いチューリップの花をすっぽりと被っていた。天井から逆さに生えた大チューリップが、樹上から獲物に喰らいついた大蛇のごとく、オゼロットの頭を呑みこんでいる。
酔っぱらいが踊っているように手足をゆらゆらと動かすオゼロットの周囲から、飛びまわっている八チドリの精霊が次々と姿を消していった。
黄色いチューリップの幹がぐねぐねと蠢き、花弁が広がってオゼロットの頭を吐き出した。
「ふあぁぁぁぁぁ……」
と、うめくオゼロットのたてがみにも、三角形の獣耳も、猫っぽい顔も、茶色い花粉にまみれている。挽いたコーヒー豆を浴びせられたような顔が、だらんと弛緩して、ふらふらした身体の動きがさらにスローモーションになった。
酩酊状態のオゼロットに四方八方から魔法の紙が貼りつき、大きな蚕の繭のようになる。そしてフレアとローズデバイスに並んで雪に転がった。
三人に駆け寄るスターサンダーの前で、巨大雪だるまの丸い胴体部分がパックリと縦に裂けた。広がる裂け目の中から、二人の男が出てくる。
「自分はエクストリームストライカーズのひとり『花の子供（フラワーチャイルド）』！」
そう名乗った男は、岩から荒っぽく彫り出したようなごつい顔つきだ。顔の骨格の武骨さに加えて、濃い口髭を生やしているために年齢がよくわからないが、まだ二十代のようだ。
そんな顔が、大きな真紅のチューリップの中にあった。
フラワーチャイルドは赤いチューリップの形の被り物を首から上に被り、中央部に空いた穴から顔を出しているのだ。どう見ても、テレビで芸人がよくやっている面白衣装にほかならない。
首から上は芸人風なのに、身体はグリーンの迷彩模様を描いた野戦服、足には重用ブーツというミリタリースタイル。
スターサンダーは、男の花の被り物よりも軍服の存在に、胸の内にモヤモヤしたものを抱いてしまう。
（フラワーチャイルドは、ベトナム戦争のときに花をシンボルとした反戦運動の活動家のことなのに、どうして兵士の格好なのかしら）
「俺の名は『停電（パワーカット）』だ」
パワーカットは短髪。顔には漆黒のアイマスクをつけている。ヨーロッパの上流階級の仮面舞踏会でつけるような洒落たデザインだ。マスクをはずせば三十歳前後のイケメンだと思われる。
スリムな長身をぴっちりと密着する黒いスーツで被い、胸には割れた丸い電球の写真がプリントしてある。
「僕のヴィランネームは『文鎮（ペーパーウェイト）』だよ」
明るく名乗る最後の男は、声だけで推測するとまだ十代だろうか。声以外はなにもわからない。なにしろ声は紙製の巨大雪だるまから出たのだ。
三人の怪人物は声をそろえて、みっちり練習したようにきれいに八モった間の声をあげた。（ハモ）
「われら、エクストリームストライカーズ！」
「このっ！」
スターサンダーは両手を伸ばし、二人と雪だるまへ向かって電撃を飛ばす。はずだった。
だが電気は放たれない。
スターサンダーは体内に特別な発電器官があるわけではない。故郷の惑星で、幼いころに能力が発現したときに診察を受けた医者の話では、精神力で自分の肉体を中継して、どこからか電気を転送して、外に放出するのだという。両親には同様の能力はない。異星人と地球人の混血によって現れたミュータント能力だと診断された。
最初は暴走しがちな電撃を思いのままにコントロールできるようになるまでは、長い鍛練を必要とした。現在では思考するだけで、自由自在に電気を操れる。
しかし今は意識を集中しても、身体から電気を出せないのだ。
黒いマスクの下で、ニンマリと気取った嘲笑が浮かんだ。
「お得意の電撃を出したくても、出せないんだろう」
自分の弱みを見せたくはない。スターサンダーは余裕のある表情で問いただした。
「いったいなにをしたのかしら？」
黒マスクの嘲り笑いがさらにギラギラと輝く。
「俺のコードネームを聞いてなかったのか。停電（パワーカット）と言っただろう。俺は電気を消滅させられる。スターサンダーの相手をするために、わざわざエクストリームストライカーズのメンバーに選ばれたんだよ。まさに俺はあんたの天敵（アークエネミー）というわけだ。俺がいるかぎり、スターサンダーはただのエロい恰好をした女というわけだ。そうそう、ミイラにした三人は死んじゃいない。ただ眠っているだけだから安心しろ」
得意満面でしゃべるパワーカットの前で、スターサンダーの身体が跳んだ。雪を蹴り、身体を回転させ、右足のブーツの甲をパワーカットの側頭部目がけて叩きこむ。しかし回転蹴りが天敵の頭にヒットするよりも速く、ペーパーウェイトが雪だるまの表面から飛ばした紙が手足に貼りついた。
バランスを崩して膝をついたスターサンダーの両手が、魔法の紙で後ろ手に固定される。両脚もひとつにまとめて紙できつく固められた。
全身を紙で封じられたチームメイトと違って、スターサンダーにはそれ以上は紙が貼りつくことなく、顔も胴体もさらしたままで拘束されてしまう。普段から煽情的すぎるとクレームがつくコスチュームで手足を縛られて、むっちりした二の腕や太腿に紙が喰いこんで小さな段差を作っている姿は、より艶めかしい空気を醸し出した。
「どうしてわたくしだけ、こんな姿？」
スターサンダーは二の腕を左右からパワーカットとフラワーチャイルドにつかまれて、力ずくで立たされた。下心丸出しで豊満な胴体に身体を押しつけてくるパワーカットが、下卑た表情で答える。

「俺たちの雇い主のご希望なんでな。まあ、俺たちもこのほうが楽しいぜ」
「雇い主とは何者？」
エクストリームストライカーズの誰も答えようとしない。沈黙の中でスターサンダーが鋭いトゲのある言葉を連ねた。
「そうそう。ごく狭い範囲で、ほんの数分だけ停電を起こして、騒ぎの間に盗む小悪党が、四国四県を転々としているというローカルニュースの三面記事を読んだわ。それと名古屋にいきなり花を咲かせて人目を奪い、その隙に盗みをするオフビートのコソ泥がいるという噂を聞いたことがあるわ。二人とも逃げ足だけは早くて、一度も捕まったことがないから、名前も姿も知られていないそうだけど」
ニヤニヤしていたパワーカットが、アイマスクの下の頬を引きつらせて吠えた。
「うるせえ！　俺たちはアップデートしたんだ！　もう昔とは違う！」
今まで無口だったフラワーチャイルドも、口髭をピクピクと震動させて、低い声音でどなる。
「そうとも。スーパーヒーローチームと謳える本物の犯罪者になった」
左右の耳もとに響く音声を、スターサンダーは平気な顔で受け流しながら、内心でうなずいた。
（やはり前はコスチュームもないB級犯罪者なのね。雇い主とやらにオフビート能力を増強されたのだわ。そこまでするほど雇い主はわたくしに特別な執着があるようだけど、過去に闘った相手かしら？　それともわたくしのストーカー？）
「まあまあ。先輩方。早く帰らないと大将にネチネチと愚痴られちゃいますよ。あの人、愚痴を言い出すと長いんだから」
パワーカットがいらついた顔を、雪だるまの高い位置にある頭部へ向ける。
「ふん。デビューしたばかりのアマチュアは黙ってろ」
「はいはい。わかりましたよ、先輩方」
軽い返答の後に、雪だるまの頭がズルッとずれた。丸い頭部が胴体の球面の上を移動して、黒い円で描いた眼が斜め下にいるスターサンダーを見つめる。
「それではシャウナのお嬢様」
それまで心理的に上手に立とうとしていたスターサンダーの表情が崩れて、目が大きく見開かれた。
「どうして、その名前を知っているの！」
雪だるまの頭がクルリと回転して、またにらんでくる。
「驚いた？　お嬢様の生まれ故郷だよね。シャ八恒星系の第五惑星シャウナは、さ」
「ありえない！　わたくしの出身星の情報は、地球の誰にも教えていないわ！」
「大将に質問すればいいよ。僕らはただのおつかいさ。ほおら、お迎えが来てる」
ペーパーウェイトの巨体がふわりと宙から浮き上がった。いっしょに紙のミイラ状態のフレア、ローズデバイス、オセロットが浮かび、スターサンダーと女体にしがみつくパワーカットとフラワーチャイルドも無重力になったかのように床から離れた。
そのまま四人のスーパーヒーローと三人のエクストリームストライカーズが屋根の大穴を抜けた途端、屋敷の上から千メートルほどの高さの空中に、突如として巨大な円盤が出現した。
空に浮かぶ円盤の直径は約五十メートル。スターサンダーからは底面しか見えないが、幼いころから見慣れた形状だ。
（シャウナの宇宙船！）
生まれ故郷の惑星シャウナで、最も普及している宇宙船メーカー製の恒星間宇宙船だ。日本近海の海中に隠してある自分の円盤型宇宙船も、同じ形式のひとまわりサイズが小さいタイプ。
（本当にシャウナの宇宙船なら、地球の探知技術から完全に隠れることも可能だわ。ローズの探査装置がごまかされたのも当然よ。きっとわたくしたちの目に見えていても、他の人の目には映っていない）
空中で首をよじり、地上へ目を向けると、屋敷の前の道を歩いている近所の人々の姿が見える。会えばご挨拶を交わす奥様も子供たちも、誰ひとりとして空に注意を払う者はいない。日光をさえぎっているはずの円盤の影も、地面に落ちていなかった
あらためて円盤に目を向けると、底面の一部が円形に開いた。
そしてスターサンダーの顔に、呪文が並ぶ白紙が貼りついた。
一瞬で意識が遠のく。

第三章　スターサンダーの秘密が明らかに！

オリジン・リビールド

顔から紙が剥がれると、スターサンダーはだだっ広い部屋の中にいた。サッカーの公式戦ができそうな面積の床に、正座で置かれている。

頭上には、宇宙空間が広がり、その半分以上を月が占めていた。スターサンダーには、天井全体がモニターになっていて、宇宙船の外の展望を映し出す仕様だとわかった。すでに地球をはるかに離れて、月の近くの空間にいることになる。

（これほど大規模な展望モニターを見るのははじめて。大金持ち向けの最高級大型船だわ。こんな船まで用意できるなんて、雇い主とはどういう人物なの……）

しかし雇い主なる人物の姿はどこにもない。

見まわせば、ミイラにされたチームメイトはスターサンダーよりも一歩退いた位置に並んで置かれた。エクストリームストライカーズはさらにその後ろ。

ペーパーウェイトの魔法の力でミイラが直立し、頭の部分の紙が剥がれて、フレア、ローズデバイス、オゼロットの首から上が現れる。

「なんだ!?　どうなってるんだ？」

「アーマーが全然動きません！」

「クソッ！　ボクの魔法を封じられてるッ！」

三人は怒号をあげながら紙の拘束から逃れようともがくが、びくともしない。フレアの剛力も、ローズデバイスの機械も、オゼロットの魔法も役に立たなかった。

スターサンダーが状況を教えると、三人とも唖然とする。

「う、宇宙船の中！」

「本当に月のそばにいるんですか！」

「こんなにジャングルから離れて、精霊を呼べるのかな？」

口々に騒ぐ声を、ホールに轟いた大音声が吹き飛ばした。

「未開人ども、自分が置かれた立場を理解できたか」

頭上の宇宙空間にワンワンと反響する声に、フレアたちが顔を歪めた。耳をふさぎたくても、手を使えない。オゼロットの三角形の獣耳がピクピクとわないた。

ただひとりスターサンダーだけが負けまいと、大声をほとばしらせた。

「はっきりとわかったわ！　パドリス兄さん！」

「俺の声を覚えていたか、レイ。地球人の血が通う汚らわしい手で、兄から正当な地位も権利も奪ったことを後悔しているのか」

大音量にかき消されまいと、フレアたちが声を張り上げた。

「兄！」

「どういうことなんですか？」

「ボクらは軍隊蟻も食べない兄弟喧嘩に巻きこまれてるの？」

ふいにサンダークラップスの目の前に青い空と海、その間を飛ぶ大型旅客飛行機が出現した。立体映像とともに、あいかわらずの聞く者のことを考慮しない大音響でナレーションが流れた。

「今を去る二十数年前のことだ。未開人が地球と呼ぶ惑星で事件が起きた」

飛行機のすぐ上に、いきなり鋭角だらけのトゲトゲした黒い飛行物体が出現した。宇宙海賊の襲撃、とナレーションが語る。黒い宇宙戦艦から伸びる機械の触手で、飛行機は拿捕された。乗りこんだ異星の荒くれ者たちによって、数人の女の乗客乗員だけが海賊船へと拉致されていく。

残された人々は飛行機ごと破壊されて、太平洋に沈んだ。スターサンダーが、この事件は地球ではただの航空事故として記録されているとつけくわえた。

太陽系を離れた宇宙海賊は、たまたま遭遇したある宇宙船団と交戦して逮捕された。その宇宙船団の団長が、惑星シャウナの名門オル家の当主イドア・オル。

逮捕された海賊船にただひとりだけ残っていた地球人である平凡な女子大生鈴掌恵美は、シャウナ星に移住した。

やがて恵美は、数年前に妻を事故で亡くしていたイドアと結婚して、娘を出産した。

娘の名はレイ・オル。

地球では、母の姓を取って鈴掌麗と名乗った。

異星人同士の混血によって発現した電気を操るミュータント能力を使い、スーパーヒーローのスターサンダーとして活躍している。

チームメイトたちもはじめて知る麗の驚異の過去が、まあまあ麗に似せたリアルなCGによって再現された。他の登場人物も、背景もすべてCGだろう。

レイが生まれた後も映像が続いた。

未開の野蛮人の恵美とレイの母娘が、いかにして邪悪な権謀術数を駆使して、イドア・オルを誑かし、名門オル家を乗っ取り、私利私欲を貪ったのかを描いている。

そして清廉潔白な異母兄パドリス・オルが、鬼畜外道な母娘から無実の罪を着せられて、正気を失った父親から勘当を言い渡され、惑星シャウナを追放される悲劇を、ゲップが出るほど仰々しく、しかも下手くそな演出で執拗に描写した。

制作費は山ほどかかっているが、退屈きわまりない映画を見せられて、サンダークラップスの四人は心底うんざりさせられる。笑えるを下手さではなく、痛くなる下手さだ。ヒーローたちの背後に控えているエクストリームストライカーズでさえ、艱難辛苦に耐える顔つきになっている。スターサンダーがぼそりと吐いた。

「パドリス兄さんは昔から、才能あふれるクリエイターだと自分だけは信じていたのよ。自分がアーチストとして認められないのは、世間の見る目がないからだって」

見る拷問の立体映像が消えると、観客全員が解放された喜びで拍手したくなった。

「未開人どもよ、これでわかっただろう。レイも、レイの母親エミも、恐るべき罪深い女だと！　レイには正義の鉄槌を下されなくてはならない！」

スターサンダーの前の床が開き、歌舞伎役者が舞台の下からせり上がってくるように、ひとりの男が姿を現した。

本人だけあって、今まで見せられていた映像のバドリス・オルと同じ顔だ。短い髪は美しい光沢のある濃い緑。瞳も緑の宝石のような、色白の顔は人気男優のように整った造形。ただし冷酷で残忍な性格がにじみ出ていて、悪役しかできないだろう。

身長が一九〇センチはある。身に着けているのは、金属の装飾を大量にくっつけた、貴族の儀式用の軍服というファッション。装飾が揺れるシャラシャラと耳に心地よい音を奏でて、膝をついたスターサンダーの前に近づき、右足の軍靴を妹の太腿の上に置いた。

「レイに正しい裁きを与えるために、俺は地球にまで来たのだ」

太腿の上で靴底をグリグリと動かされるが、スターサンダーは屈辱も痛みも美貌に表さず、凛とした視線を異母兄へ向ける。

「お久しぶりですわ、バドリス兄さん。まず聞きたいのですが、地球は今、コズミックピースキーパーのロッテンピースウイルスに冒されています。もしかして兄さんが」

「その通りだ！　俺は、レイとエミのせいで財産を奪われて、シャウナを追放された。俺はレイがいる地球へ行く宇宙船を手に入れるために、コズミックピースキーパーに加わって、やつらが知らなかった地球人の存在を教えたのだ」

「わたくしに復讐するためだけに、地球の人々を銀河の大悪に売ったのですか！」

「やつらのイカレた平和思想など、俺にはどうでもいい。コズミックピースキーパーに入ったのは、目的のための手段にすぎない」

「もう目的は達しています。ウイルスを除去してください」

「そうはいかない。任務通りにウイルスを撒かないと、コズミックピースキーパーに船を取り上げられてしまうからな」

「バドリス兄さんはいつもそうです！　自分の身勝手な欲望と目的のために、オル家の名前を利用して人々を騙し、何人もの女性を犠牲にした。バドリス兄さんが父様に追放されたというのも嘘です！　父様がバドリス兄さんを裁判にかけようとして、勝手にシャウナの外へ逃亡したのです！　すべてを自分に都合のいいようにねじ曲げて」

「黙れっ！」

「あぐっ！」

スターサンダーの腹が強く蹴り上げられた。豊満な身体が人形のように背後へ飛ばされ、床に転がされる。

フレアたちが怒りの声をあげるが、バドリスは妹に視線を据えたままで、聞く心なさそうに右手を振った。

「約束通り、サンダークラップスの残りはおまえたちにくれてやる。好きにしろ」

歓声をあげるエクストリームストライカーズと怒るフレア、ローズデバイス、オセロットを乗せた床の一部が、エレベーターのように階下へ降りていく。

スターサンダーの縛られた身体が横たわる部分だけがきれいに残され、新たに現れた床が穴を元通りにふさいだ。同時に手足を緊縛していた紙が力を失い、ハラハラと身体から剥がれた。

（パワーカットがいなくなったわ！　今なら電撃を使える）

素早く立ち上がり、異母兄と向かい合うと、普段はほとんど呼吸をするように発動させられる電気の召喚に、全身全霊をこめた。ホールを焼きつくす勢いで、全身から強烈に放電するつもりだ。

「ええっ⁉」

また不発。身体からあふれるはずの電撃はすべて消え失せた。目の前でバドリスがせせら笑っている。

「どうして⁉」

「俺がついうっかりして、パワーカットを下がらせたと思ったか。パワーカットの電気を消す能力を、コズミックピースキーパーの科学技術で増強させたとき、俺の身体にもコピーしたのだ。未開人との混血で生まれたレイの忌まわしい能力も、俺には効かんぞ。俺が地球に下りて、直接レイを捕まえてもよかったが、あらゆる機械が汚染物質を撒き散らす未開惑星に行くなど」

兄が言葉を終える前に、スターサンダーは素早く間合いを詰めて、左足の蹴りを放った。確実に相手の顎にヒットすると見えた踵が、バドリスの右手であっさりとつかまれる。

「なっ⁉」

バドリスの右手の一振りで、スターサンダーの身体が床を離れた。片手だけで扇く放り上げられ、落下してくるころに、バドリスの軍靴の金属プレートで補強したつま先が跳ぶ。スターサンダーは回避を取れずに、腹に蹴りが容赦なくめりこんだ。

「がふっ！」

激痛が胴体を貫き、身体が風に巻きあげられた木の葉のように空中でクルクルと回転して、背中から床に叩きつけられた。名門オル家の教育の一環として子供のころから本格的な武術を習得してはいるが、身体能力はあくまで常人だ。電気を封じられれば、ただの女にすぎない。

（それでも、バドリス兄さんの力はおかしいわ）

同じ指導者から武術を習ったバドリスとは、何度も組手をした。今の兄はかつてより、スピードもパワーも段違いだ。

「兄の強さを思い知ったか！」

歓喜があふれる咆哮を放って、バドリスの右足が床に倒れた妹の頬をかすめて踏みつぶした。ピキッと音をたてて、軍靴の周囲の硬い床に細かいひびが広がる。

（普通のシャウナ人の力じゃないわ。間違いなくバドリス兄さんは肉体の強化術を受けている！）

「未開人との混血のレイが、正統なオル家の後継者、真正のシャウナ人である兄に勝てるはずがない。すべてにおいて俺はレイに優っているのだ！」

スターサンダーはよろけながらなお立ち上がり、憤怒のこもった瞳で、熱弁をふるう兄の顔をにらみつけた。

「妹に勝ち誇るために、自らの肉体を改造して、銀河系全体の敵の手下になり、地球人を滅ぼそうとする。バドリス兄さんは底なしに堕落しました！　父様が知れば、どれほど嘆かれることか、想像もできません！」

「底の見えない堕落をするのはレイのほうだ。レイが堕ちる手本を見せてやる」

またスターサンダーの前の床に穴が開き、二つの人影がせり上がってくる。

正面に現れたのは、上品なダークブルーのスーツと膝下まであるスカートを着た若い美女。首にはライトブルーと赤のスカーフを巻き、靴は黒いパンプス。

短い髪に縁どられた顔はハッとするほどの美女だが、瞳に力がなく、茫洋としている。開いた口から出る声は滑舌が良く、ハキハキしているのに、心ここにあらずと聞こえた。

「わたしは日本スカイエース航空成田発ロサンゼルス行き１８７便のキャビンアテンダントの椎名美里です」
「その便名！　母様が宇宙海賊に拉致されたときに乗っていた飛行機！　その名前も母様から聞かされたわ。母様といっしょに宇宙に連れさられたキャビンアテンダントの名前よ」
キャビンアテンダントは答えず、口を閉ざした。
代わりに、右隣の白いワンピースタイプのナースの制服を着た美女が、口を開いた。長い髪を頭の上できちんとまとめているが、やはり美しい顔に表情がなく、声に感情がない。
「わたしはロサンゼルス行き１８７便の乗客、堀口総合病院（ほりぐちそうごう）のナースの西村瑛奈（にしむらえいな）です」
左端の三人目は、白いブラウスに、モスグリーンの膝下までのスカート。
「ロサンゼルス行き１８７便の乗客、高橋梨花（たかはしりか）、清風大学教育学部の教育実習生です」
ゆるやかに波打つ髪は背の中ほどまであり、女教師らしい服装に比べて、童顔でまだ高校生ほどに見える。
地球人美女の背後に立つバドリスが、ナースと女子大生の頭をつかみ、得意満面に笑って、黒髪をクシャクシャと乱した。ナースのきちんとまとめた髪型が崩される。
「二人の名前も、母親から聞いているだろう。三人とも王ミといっしょに宇宙海賊に拉致された地球人の女だ。地球の女たちは、王ミ以外は奴隷商人に売られた。あちこち探したが、見つけられたのはこの三人だけだったぞ」
（三人とも似ているわ……）
スターサンダーは地球に来てすぐに、母親が乗っていた飛行機のことを調べた。地球では、原因不明の空中爆発で全員が太平洋に沈んだ事故とされているが、犠牲になった乗員乗客のニュース映像や写真も見た。目の前にいる三人の顔も、資料で見た記憶があった。
（……でも、ありえない）
「嘘だわ。海賊にさらわれた女性はすべて母様と同年代よ。三人とも若すぎる。着ている服もエクストリームストライカーズに用意させたのね」
「若い理由は今からわかるぞ。やれ！」
キャビンアテンダント、ナース、教育実習生が同時に同じ言葉を口に出した。
「バドリス御主人様のお望みのままに」
「悦んで」
「お仕えいたします」
ガラス玉のようだった女たちの瞳に炎が灯るのを、スターサンダーは見た。唇の端が上がって、媚びを含んだ艶めかしい笑みを作り、そろって舌で唇を舐めて濡らす。
（この女性たちを、どうすればいいのかしら？）
スターサンダーは判断に迷った。かつてシャウナで異母兄が犯した事件のこともあり、どうしても犠牲者に思える。
「皆さん、わたくしの話を聞いてください。バドリス兄さんに従わされているのであれば、わたくしが必ず解放します。だから、ああああっ！」
ナースの瑛奈と教育実習生の梨花が、いきなり予備動作なしにダッシュした。スターサンダーが反応できないスピードで背後にまわり、右腕を瑛奈に、左腕を梨花につかまれる。
「なにをするの！」
スターサンダーは二人の手を振りほどこうとするが、二十本の細い指でがっちりとつかまれてびくともしない。あきらかに普通の女の力ではなかった。
「あなたたちも身体を強化されているの！」
もうひとつの能力を使ってみる。身体から電撃を発する能力とは別に、周囲の電気をコントロールできる。人間の身体に触れれば、脳の指示を全身に伝える電流である神経パルスを吸収して、動きを封じられる。
だがその能力も発動できなかった。無力のままもがくスターサンダーの前に、今度はゆったりとキャビンアテンダントの美里が迫ってきた。
「最初はわたしが、レイ様のお相手をさせていただきます」
「なにを、んんん！」
口をふさがれた。美里が顔を寄せて、キスをしてくる。唇に唾液で濡れた舌が押しつけられ、密着したかと思うと、即座に唾液にまみれた舌がヌメヌメと侵入してきた。
スターサンダーは思いっきり首を横に振り、キスを引き剥がす。口の中からキャビンアテンダントの舌が抜けて、唾液を飛び散らせた。
「ダメよ！　こういうことを他人の命令で強引にするのは、絶対にダメ！」
真剣な顔で、目の前の美里をにらみつける。シャウナ人はセックスに開放的な文化を持つ種族であり、重要なコミュニケーションの手段としている。だからこそ互いの合意のない性行為は大きなタブーとされていた。
しかし美里は唇の端から涎の糸を垂らしたまま艶然と笑いかけてくる。美里だけでなく、左右の瑛奈と梨花も笑い、また声をそろえて同じ文言を語った。
「わたしたちにはバドリス御主人様の命令に従って、どのような淫らな行為にも身をまかせるのが最高の悦びです。レイ様の御意志は関係ありません」
美里の右手がスターサンダーの後頭部にまわって、後ろ髪を強く握られた。
「痛っ、んんっ」
固定された顔に、再び唇が押しつけられて、食いしばった上下の歯列を舌先で強引にこじ開けられる。舌すらも常人よりも強力だ。
スターサンダーは自由な右足でキャビンアテンダントの腹を強く押したが、相手を押しのけてキスをほどくのは不可能だった。
「んくっ、んむうう……」
（う、嘘っ！　そこまで届くなんて！）
口内の奥にまで、舌先で触れられた。どう考えても、地球人の舌がこれほど長いはずがない。口の中で長い舌が蛇のようにくねり、自分の舌や歯、口蓋に頬の内側を舐めまわされ、こすりたてられる。
普通ではないディープキスの快感とともに、普通ではない味覚が口内に広がり、染みこんだ。
（甘い！　甘いわ！　なんて甘い唾液なの！　それに量が多いわ！）

美里の唾液が次から次へと流しこまれて、口の中が果汁のように濃密な甘さで充満する。どうしようもなく唾液を飲み下すと、まるで喉の奥から食道にまで味覚を感じる器官ができたように、濃厚な甘みが降りていくのがわかった。

（舌の長さ。唾液の甘さ。この人は美里さんのふりをしている異星人だわ。んんん）

「はああ」

スターサンダーの口から長い舌がずるずると引き抜かれ、唾液と吐息があふれた。こぼれた唾液が糸を引く雫となって、コスチュームのバストに滴り落ちる。

「あはああ……」

美里も甘ったるい息を吐いて、首に巻いたスカーフで濡れた唇をぬぐい、陶酔をあらわにした顔で告げた。

「レイ様、もっとわたしと楽しんでください」

スーツのポケットからナイフを取り出した。スターサンダーは警戒するが、よく見ると刃が厚くて丸い。本物ではなくおもちゃのようだ。鋭さのまったくない刃が、スターサンダーの首のチョーカーのすぐ下に当てられ、胴体の中心を縦に滑り下ろされる。

「ああっ！」

スターサンダーのコスチュームは胸の中心からへその下まで生地がなく、素肌が露出しているように見える。実際には胸だけでなく腕も太腿も透明な薄膜に被われていて、コスチュームの赤い部分と同じく防弾防刃だ。

胸を包む透明なコスチュームが、ナイフが進むにつれて切断されていく。しかし肌にはいっさい傷がついていない。正しくは切っているのではなく、ナイフ型の装置でコスチュームの材質を分解している。地球人から見れば驚異のコスチュームも、シャウナの技術ではたいして珍しいものではなかった。当然、簡単に分解する方法もシャウナにはある。

コスチュームがへその位置まで切られ、美里の手で左右に広げられた。普段から半分が覗いて物議をかもす豊乳が、完全に外に飛び出した。密着する生地から解放された巨乳が弾み、自重で少し形を崩して位置を下げた。

艶めかしくたわんだ白い球体の頂点には、桜色の乳輪が咲き、バストサイズにふさわしい大粒の乳首が突き出ている。

「くっ……」

普段から肌の露出の多いコスチュームで平気で人前に出るスターサンダーだが、この状況で胸をさらけ出されることに、たまらなく恥辱を感じた。

美里も両手の指で素早くダークブルーのスーツのボタンを上から胸の下まではずし、左右に広げた。スーツの下には、本来の制服ならあるはずのブラウスもブラジャーも存在しない。キャビンアテンダントの裸の乳房が出現する。

「その胸！　どういうこと⁉」

目を見張るスターサンダーの前で、あらわになった爆乳が盛大に揺れる。制服の胸のふくらみはせいぜいCカップというところだった。それなのにはだけたスーツから飛び出した二つの乳房は、少なく見積もっても G カップはある。サンダークラップス最大を誇るスターサンダーの胸よりひとまわりもふたまわりもボリュームがある爆乳房は、想像される重量をものともしないで、前につんと迫り出している。大迫力の巨乳球の先端からキリキリと勃起する乳首は、小指の第二関節までの長さと太さがあった。

「驚かれましたか。この制服は視覚を歪めて、実際の胸の大きさを隠す効果があるんです。バドリスご主人様が、そのほうが面白いとお与えくださいました」

瞳に熱狂の炎を燃やし、同時にじっとりと瞳を潤ませて語る美里の背後で、バドリスがニヤニヤと笑っているのが見えた。シャウナ人の生活習慣に従って、椅子ではなく、床に置いたクッションにあぐらをかいている。

スターサンダーは意図が不明のギミックよりも、キャビンアテンダントのバストサイズが気になった。

（本物の美里さんは、これほど大きな胸ではなかったわ。やはり別人。それとも……）

「レイ様、わたくしのおっぱいを感じてくださいませ」

美里が両手で爆乳を持ち上げ、近づいてくる。特大の勃起ピンク肉筒は対面するスターサンダーのまだ勃ってはいない乳首を目指していた。

「美里さん、やめて！　うっ」

向かい合う二人の乳首が触れ合った。美里がさらに前進して、手で自身の胸を揺れ動かし、乳首同士をこすり合わせる。

「はああっ、気持ちいいです！」

すぐに反応を示したのは、責めている美里のほう。もともと妖しく微笑んでいた美貌が、さらにトロリと蕩けて、満面に上気した歓喜の色を浮かべる。

「わたしの乳首とレイ様の乳首がくちゅくちゅして、あっんん、とっても感じます！　ああああっ、出るうっ！　美里のいやらしいおっぱい汁が出ちゃいますう！」

「えっ、どういう、ああっ！」

美里の二本のピンクの肉筒が猛烈に震動して、細く柔らかい管の中から液体が出る音が鳴る。

ビュルッ！

ビジュルルル！

太く長い乳首の先端が開いて、白い粘液がドッと噴出する。

「あっおおおおお！　おっぱい汁がいっぱい出て、一度目の絶頂をイッちゃいますううううっ‼」

爆乳からあふれる白い体液はすべて、押しつけられているスターサンダーの乳首と乳房に浴びせられる。露出した豊乳だけでなく、コスチュームを着た腹も股間もべっとりと白く染められた。

エクスタシーとともに母乳を分泌する種族は、宇宙ではそれほど珍しくもない。白い体液が出るだけなら、スターサンダーも驚きはしなかっただろう。

しかし、今も大量のミルクを出しつづける二つの乳筒がさらに直径を増して、先端の噴出口が大きく広がった。美里の歓喜の叫びがいっそう高くなる。

「あっひいいいい！　見て！　レイ様、よく見てえ！　美里の淫乱なおっぱいを見てくださいっっ、イックううううううっ‼」

ミルクの湧出が止まったと思うと、また白いものが出た。今度は粘り気のある液体ではなく、細長い個体。左右の広がった母乳穴から一本ずつ、合計二本の白いものがうねうねと裏返しながら伸びる。

それはひと言でいえば。

「触手！」

と、スターサンダーはうめいた。触手としか表現のしようがない二つのものが、自分の裸の胸の上を這いまわっている。ようやく理解した。どうして美里が年齢を重ねていないのか。かつてとは違う爆乳になっているのか。

「美里さんは『最悪な贄（ワーストワーム）』の犠牲になったのね！」

美里はさらに触手を搾り出すように、両手の指を柔らかい乳肉に食い入らせて、快感に身悶えた。

「はい、さようです。はああ、わたしはワーストワームに寄生していただいて、この素敵な牝奴隷の肉体になることができました。うぅんん、とっても感謝しています」

美里の表情と言葉に、スターサンダーは名状し難い戦慄を覚える。ワーストワームの名はシャウナで検索した宇宙犯罪の資料で知った。もとは銀河の辺境の惑星で発見された寄生生物だという。その特殊な生態を利用するために様々な研究をされたが、結局人体への危険が著しいので銀河規模で利用が禁止された。

しかし裏社会では研究が進み、ついに寄生した女を理想的なセックス奴隷にする道具、裏の商品名『ワーストワーム』になった。見たのは一般に配布される公的な資料だったので、文字と音声の解説だけで、犠牲者（せいしゃ）の映像は添付されてなかった。

はじめて実際に対面した犠牲者のあまりにも凄惨な姿に、愕然（がくぜん）とするしかない。

ワーストワーム自体には知性がない。ただ寄生した女の肉体を作り替える。性感が高まり、淫乱な肉体になる。他人の命令に従順に従い、どんな酷いことでも喜んで実行して、それを大きな快楽とするようになる。不老不死ではないが、外見の年齢を変わらなくするという。

美里の肉体の変異と精神の変容そのものよりも、それを望んだ者たちの邪悪な欲望に背筋が凍る思いがする。

美里は自ら乳肉を強く揉みしだき、乳首のミルク孔と、みっちりとつまった触手とのわずか隙間から、白い体液をボタボタと押し出して、よがり声をあげる。

「はああ、んっ、くうんん、レイ様もわたしと同じ至福の境地をたっぷりと味わってください」

搾乳オナニーに耽溺するキャビンアテンダントの乳首から伸びた二本の触手が、スーパーヒーローの左右の乳房にギチギチと巻きつき、まるで紐で縛られたハムのようなありさまにされた。触手のうねる白い先端が、乳首に強く押し当てられる。

「ひいっ！」

敏感な乳首に、指先を針でつつかれたようなわずかな痛みがチクッチクッと続く。そして異様な感覚が胸の中に生まれた。

（は、入ってくる！　なにかが、胸の中に入ってきているわ！）

細い紐のようなものが、うねうねと蛇行しながら、乳首から量感たっぷりの乳肉の中へ潜ってくる感触が、鮮明に感じられる。理性では、異常で不気味に思えてしかたない。しかし胸からは別のものが湧き上がってきている。

胸全体が熱く滾けるような快感だ。

性の経験が豊富なスターサンダーにして、言葉で表現できない未知の愉悦が、謎の紐のうねりと進行にしたがって大きくなっていく。

「あっ、あああ……こ、これは、はうぅっ、ワーストワームがわたくしの中に入ってきているの、あっおおおう！」

「さようです。レイ様の胸の中に、わたしのワーストワームが子供を植えつけたのです。これでレイ様も、わたしと同じ素敵な肉体になれます。さぞやパドリス御主人様もお喜びのことでしょう」

美里の唇がめくれ上がり、白い歯の列を見せつけて笑った。

「これからわたしが体験したものを、牝奴隷の椎名美里が味わったことを、レイ様にも体験していただきましょう！」

周囲が変貌した。宇宙船の広い展望室も、頭上の宇宙空間もなくなる。

かわりにまったく別の光景が広がっている。

「こ、ここはどこ!?」

第四章　牝奴隷と巨獣姦ショー

そこは、あからさまにいかがわしい場所に見えた。

名門オル家のお嬢様ならば、けっして足を踏み入れない場所。地球でスーパーヒーローをはじめてからは、何度か潜入したり、強引に連行された場所と同じ空気だ。

スターサンダーと美里がいるのは、窓のない空間。お世辞にも清潔とは言い難い壁や天井の室内に、大勢の男たちがたむろしている。全員が地球人やシャウナ人の間に入っても多少の違和感があるだけの、いわゆるヒューマノイド種族たち。銀河系の多数の惑星でそこそこなヒューマノイドが進化して、異星種族間で子孫を作ることが可能なのは、銀河系最大の謎のひとつとされている。

男たちはひとり残らず悪辣で凶暴な気配を発散している。正義感や倫理観の欠如が如実に顔に出ている。ここは内なる凶悪な欲望を隠す必要のない場所だろう。手に酒の瓶や肉の塊を持ち、下卑た言い合いをする男たちが円陣を作っている。

円陣の中心がぽっかりと空いていて、そこにスターサンダーと三人の牝奴隷は立たされていた。

周囲の光景は変わっても、自分と美里の姿も、巨乳と爆乳をさらけ出して向かい合う体勢も変わっていない。なにより乳首と乳首をつなぎ、双方に異形の快感を与える白い触手がそのままだ。

すぐにスターサンダーは理解した。娯楽用の立体映像だ。シャウナ人にとってはあたり前の技術。映像に合わせて男たちの野卑な声が聞こえるだけでなく、部屋にこびりついた臭いまで感じられるのは、香料が散布されているから。

見渡せば男たちの中に、バドリスも床に座ってすました顔をしている。立体映像の群衆相手に、自分だけは周囲の下品な輩（やから）とは違うという態度だ。

美里が微笑み、周囲の男たちへ愛嬌たっぷりに両手を振りながら答えた。

「この映像は惑星アズロ・パロロの闇クラブを再現したものです。わたしはかつて、この闇クラブで見世物にされていました。宇宙海賊から奴隷製造組織に売り飛ばされ、ワーストワームを植えつけられてから、二十年以上の間にわたしが体験した様々なことのひとつです」

美里の背後の床が開き、床下へとつづく階段を黒い影が上ってくるのが覗けた。地鳴りのような唸り声と、濃密な動物の体臭が立ち昇ってくる。

「グギムルルルルル……ルルル」

「ああ、おいでになられたわ！」

背後から聞こえる獣の唸りに、美里の上気した美貌がさらに緋色を濃くした。爆乳を持ち上げて握る手に自然と力が入り、乳首から伸びる二本の触手がブルブルと振動する。触手の根元から快楽のミルクがダラダラと流れ落ちた。

触手の振動が縛られたスターサンダーの胸に伝わり、乳首から挿入された紐がのたうち、巨乳の内外から快感を搾り出される。

「あうん、あはぁ」

スターサンダーは身悶えながら、美里の肩越しに床下よりヌッと現れた姿を目にした。やっぱり獣だ。立体映像のクラブの中に気取った声が流れた。

「皆様ご存じ、当クラブのスーパースター！　最高の色男！　グルングヤラの登場だあ！」

観客たちの大歓声を浴びたグルングヤラとは、スターサンダーが見たことのない大きな獣。前かがみになった身体は、ニメートル以上はある。頭はマントヒヒをさらに凶悪にデフォルメしたよう。身体はヒグマとゴリラの中間に見える。全身が影のように黒い剛毛に覆われて、触れればチクチクと痛そうだ。尻からは毛のないトカゲじみたしっぽが長く伸びて、階段に引きずっている。

剥き出した鋭い牙も、盛り上がる筋肉も、見るからに禍々しい猛獣だが、最大の問題はグルングヤラだけは立体映像ではなく、実物だということ。

バドリスが高いおもちゃを自慢する子供のようにしゃべる。

「そいつはわざわざアズロ・パロロのいかがわしい店から買った。もともとは惑星のジャングルに棲息する猛獣だそうだが、ヒューマノイドの女を犯すように改良して調教した貴重な家畜だぞ。けっこうな値段だったが、コズミックピースキーパーがくれた活動費に比べればはした金だ」

スターサンダーの目には、グルングヤラも哀れな欲望の犠牲者としか映らなかった。

美里は首をよじり、ノスタルジー混じりの熱い視線を、グルングヤラの股間に集中していた。視線の先には、密生する黒い獣毛の中から、一本の赤黒い肉の巨棒が力強くそびえ勃っている。

「どうだ、美里。ひさしぶりにグルングヤラに会えてうれしいだろう。アズロ・パロロにいたころには、毎日その獣の相手をしていたのだからな」

「ああ、感謝いたします、バドリス御主人様。あまりに懐かしくて、おっぱいがはしたなく疼きます」

「あひいっ！」

またGカップが揺れ動き、スターサンダーを悦楽に引きずりこむ。

キャビンアテンダントの満れた唇から、ねっとりとした声が巨獣の牡根にからみつかせるように流れた。

「ああ、偉大なるジャングルの獣の王者様。わたしにご奉仕させてください」

美里が身体を引くと、触手がスターサンダーの胸から離れ、スルリと乳首の内側にもどった。

しかしスターサンダーの乳首に入ったものはもどらず、胸の中に残ったままもがいて叫ぶ。

「ああ、待って！　わたくしの胸の内側に、くう、なにかが残されているわ！」

「先ほどお教えした通り、わたしのワーストワームの子供を、レイ様のおっぱいにおすそ分けしてあります」

美里の顔に憐れみはない。あるのは新たな仲間を歓迎する悦びだけだ。

「すぐにレイ様の中でワーストワームが成長して、寄生されて、バドリス御主人様の牝奴隷にしていただけます」

「そんな！」

愕然とするスターサンダーを無視して、美里はグルングヤラの前に立ち、いそいそと両手で牡の肉棒を握った。キャビンアテンダントの細い指と比べれば、ほぼ垂直にそそり勃つ巨獣の逸物はあまりに大きい。太さも長さも子供の腕の肘から先ほどもある。先端の亀頭も握り拳のようにゴツゴツと膨れあがった。全体が毒々しい赤黒い色で、青黒い血管がからみついた鷹のように浮き上がっている。

「はああ、グルングヤラ様の勇猛な牡に、心をこめてキスさせていただきます」

美里がうやうやしく亀頭に唇をつけた。

「チユッチユッ、ンチュ、クチュウ……」

ことさら大きなキスの音色を奏でて、顔の角度を変えて亀頭のあちこちに口づけの雨を降らす。
異星の猛獣のマントヒヒに似た顔が左右に揺れ、顔の先にある鼻の穴を広げ、唇をまくり上げて牙の列を露出した。
「ギョルルルブル」
今までとは違う音色の鳴き声が、牙の奥からあふれ出る。新たな声を聞き、表情を見るだけで、グルングヤラが動物としてはかなり高い知性がある、とスターサンダーには感じられた。
（人間の女に性欲を感じて、奉仕させる悦びを味わえるほどに、知性を歪めて底上げされているのだわ。美里さんのほうも、あんなに一生懸命になっている……）
美里は熱意をこめて、獣の亀頭にキスをつづけている。肉幹を握る両手も上下に動いて、さらにひねりを加えて愛撫した。
「次は、舐めさせていただきます。はああ、わたしの舌を味わってください」
美里の口が開き、舌が外へ伸びた。唾液に濡れたピンクの肉が、まるで水晶球を磨きあげるように、亀頭の表面をていねいに這いまわる。
「ピチャ、ペチュ……ルロウ、レル……クチュルル……」
スターサンダーはついさっき自分の口の中を蹂躙した舌を直接視認して、獣の肉凶器を舐めまわす動きに驚嘆させられた。
（長いわ！　動きもすごく器用で、地球人とは思えない。あれもワーストワームの肉体改造のせいなの？）
「あっ！」
両腕をつかんでいた環奈と梨花に背中を押されて、スターサンダーは前に進まされた。頭上から黒い毛がびっしりと生えた大きな左腕が落ちてきて、六本の太い指でむんずと頭をつかまれる。頭のまわりに触れる指の力を感じて、グルングヤラが巧みに握力をコントロールしているとわかった。その気になれば生卵のように頭を握りつぶして、脳を床にぶちまけられるだろう。
頭をつかまれ、グイッと猛獣の股間に引き寄せられる。美里がフェラチオをつづけながら、スターサンダーのための場所を空ける。スターサンダーの眼前に、亀頭が来る。赤黒い表面を熱心に舐めまわす舌の動きを見せつけられ、悦びに輝く美里の美貌と間近に対面させられた。アップで見せつけられると、非人間の特大ペニスの圧倒的な迫力と、フェラチオ奉仕に溺れる美里の顔の淫らさに脊筋が慄える。視覚だけでなく、美里の舌が鳴らすピチュピチャという濡れた音色が鼓膜を叩く。巨根が放つ猛々しい獣の性臭によって、鼻孔を満たされ、肺の細胞のひとつひとつを染め上げられた。
「はううっ！」
胸がカッと熱くなった。乳首から乳肉の奥まで貫くワーストワームが、暴れながら急成長をしているように感じる。
「あっ、ああ、はおお……」
二つの胸の中で寄生生物がうねくるたびに、乳房と乳首がビリビリと痺れて、熱い疼きのパルスが縦横無尽に走りまわる。
美里が舌を亀頭の上でのたうたせながら、器用に言葉を発した。
「レイ様もグルングヤラ様の野生の勃起のたくましさに感銘を受けて、胸がズキズキしているでしょう。もう舐めたくてたまらなくなったでしょう」
亀頭にスターサンダーのためのスペースを空けるために、美里の舌先が反対側へ移動した。
「そんなことはないわ」
否定した途端に、頭をつかむ剛腕が動き、顔を亀頭に押しつけられた。
「熱いっ！」
と、叫んでしまう。鼻先と唇にきつく密着する唾液まみれの亀頭は、本当に体温が高いのか、ワーストワームのせいで生み出された妄想なのか、判然としない。
グルングヤラの胴体が驚異的な柔軟さで前に湾曲して、スターサンダーの視界に大きな頭が下りてくる。偽マントヒヒの顔が悪辣なニヤニヤとしか表現のしようがない笑いを作り、股間のスターサンダーをにらみつけた。
「グュルルルルル、ムゴルル！」
歯列の中で太い舌が蠢き、人語ではない命令を下す。唸り声とともに、六本の指の一本が髪をグシャグシャと掻きまわした。
指先が頭皮をなぞるゴリゴリという音に、異母兄の喜々とした声が重なる。
「レイもおとなしくグルングヤラの言うことを聞いたほうがいいぞ。聞き分けのない牝奴隷は手足を引きちぎるように調教してあるからな。でも安心しろ。貴重な牝奴隷を殺さないようにも調教してある」
パドリスの言葉には、あまりに異常だからこそ真実味があった。
（昔よりもさらにろくでなしになっているパドリス兄さんなら、平気でやらせる……舐めるしかないわ）
舌を出して、亀頭に触れる。
「うあああああっ！」
瞬間に、強烈な味覚が舌の表面を焼き、矢のように口から脳へと突き刺さった。
スターサンダーは地球に来る前に何人もの男のモノにフェラチオをした経験がある。シャウナ人としては普通のことで、すべて互いに同意しての行為だ。そして地球でスーパーヒーローをはじめてからは、犯罪者に口での奉仕を強制されたこともあった。
どちらの経験ともまったく違う。まるで亀頭に劇薬が塗られているかと思うほど、強烈で辛辣な刺激だ。反射的に舌を引っこめて、顔を離そうとしたが、グルングヤラの腕力が許さない。
「ギムグルルルル、グォロロロッ！」
驚倒の唸りをあげて、さらに強く顔を亀頭に押しつけられた。豪腕が上下に動き、スターサンダーは顔全体で亀頭と肉幹を何度もこすらされる。摩擦で顔の皮膚が破れ、目や鼻や唇がえぐり取られる恐怖に駆られて、たまらず叫んでしまった。
「あぐうっ、やめて！　んぶっ、舐める！　ああ、ちゃんと舐めるわ！」
人間の意図をどうやって判断しているのか、疑似マントヒヒ顔に獰猛な満足が浮かび、巨腕の動きが止まる。
スターサンダーはまたおずおずと舌を出して、毒物としか思えない亀頭に這わせた。
（ああっ、まずいッ！）
「んちゅっ」
（あううう、えぐいッ！）
「ぴちゃ、るろ」
（きついッ！　臭いッ！）
「じゅる、むちゅるる」
最初の衝撃は少し薄れたが、今にも嘔吐しそうになる苦しい味だ。実際に胃がグルグルと悲鳴をあげて煩悶している。

（あああ、やめずに、ううううっ、舌を動かして舐めつづけるのよ）

自分を叱咤激励して舌を横笛にして奉仕していると、吐き気と同時に、自分の中で別のものが湧いてきた。美しい慈恋で終わるラブストーリーを読むのに似た、せつない悦びのようなものが、脳内に泉のように湧いてくる。同時に寄生生物が入ったままの巨乳もジリジリと疼きを大きくした。

（なんなの、これは⁉　わたくしがまるで望まぬフェラチオを悦んでいるみたいな……ありえないわ！）

「すてきでしょう、レイ様」

武骨な亀頭を挟んで向こう側から、美里が甘ったるい声をかけてきた。

「ジャングルの獣の悪臭と味が酷ければ酷いほど、頭に悦びがあふれてきます。身体が疼いてたまらなくなります。はあああ、それがワーストワームに寄生されるということなのです」

自身の異常な反応を指摘されて、スターサンダーは問いただすにはいられない。

「そんな身体にされて、美里さんは平気なの⁉」

キャビンアテンダントの舌を伸ばした笑顔が、ますます淫靡に染まった。

「ワーストワームに寄生される前のわたしなど、もう宇宙のどこにも存在しません。あはっあ、ですから、なんの問題ありません。レイ様の前にいる、獣のペニスをしゃぶっていやらしい歓喜を感じているわたしが、正真正銘のわたしです」

キャビンアテンダントの言葉に、またも異母兄の笑い声が重なる。

「はははははは。美里はいい子だろう。レイもすぐに最高のいい子になれるぞ」

「違う！　すべてが間違っているわ！　なにもかも、最悪の間違いよっ！」

二人の言葉を否定するスターサンダーの前で、美里が亀頭を咥えた。

「んむ、んぶぶふ……」

広がった唇の端から漏れる吐息を鳴らして、子供の握り拳ほどもある獣肉の塊を、いともやすやすと口の中に含む。美里の顔とスターサンダーの顔が触れ合い、こすれた。

「美里さん！」

経験豊富なスターサンダーでも、この大きさの亀頭をすべて口に入れるなど、物理的に不可能だと思う。

「くぶ、うむぶぶふうう……」

だが美里は両手で肉幹を傾け、ほぼ水平にすると、さらにずぶずぶと呑みこんでいく。喉がぼっこりと膨らみ、皮膚を通して食道の中を亀頭が進んでいく様子が、外からくっきりと見える。

「う、嘘……」

唖然としてつぶやくスターサンダーの前で、美里の顔が止まった。さすがに子供の腕の長さの大肉棒をすべて喉に収めることはできないようだ。顔が後退して、映像を逆再生するように口からねっとりと濡れた肉幹が吐き出される。喉にでっぱる亀頭が口の中までもどった。そしてまた美里は太棒を自分の中に押し入れていく。

「……うくっ……ぐむんん……あぶぶぶぬぬ……」

スターサンダーが凝視する前で、美里が顔を動かしつづける。喉の肌に浮かび上がる亀頭と肉幹の形が、前に進んでは後退する。見ているだけで、喉が裂けて、牡棒が飛び出してくる幻想に囚われてしまう。

「んおおっ！　ぶっふっ！　くっむぶむむううう！」

美里の顔の動きがどんどん激しくなり、喉の中の猛獣のピストンも加速する。

グルングヤラの喉もカエルの鳴き嚢さながらに膨らみ、大きく開いた口から野太い咆哮を放った。尻から生える爬虫類っぽい尾がバシバシッと床を打ち鳴らす。

「グググボボボボボオオオオオオッッ‼」

肉幹が股間の根元からブルブルと振動し、美里の喉に浮かぶ亀頭のでっぱりが一気に膨張する。喉の内側でなにかが爆発したように、ひとまわり大きくなった。

（射精されている！　美里さんの喉の奥で、亀頭から精液が出て）

「ああっ！」

美里の広がった唇と肉幹の隙間から、黄色みがかった白い粘液が噴出した。わずかに遅れて、二つの鼻の穴から盛大に獣の精汁が噴水のように飛ぶ。

ブリュ！　バリュリュリュウウ！　ビジャアアアアッ！

「ひいいっ！」

思わず悲鳴をあげるスターサンダーの顔面に、逆流した二筋の精液がふりかかった。顔を流れ落ちた獣液が口に入ると、亀頭を舐めたときよりもはるかに凶悪な猛毒の味が炸裂する。

「あっ、かっ……あく……くんんん！」

脳内におぞましいイメージがあふれる。胸の中の寄生生物が猛獣の精液を養分にして、急速に成長し、体内に根を張っていく感覚が、頭の中に轟く。科学番組で見た植物の毛根が地中に広がる高速映像そっくりだが、ワーストワームに潜りこまれているのは自分の細胞に他ならない。

「変えられる！　わたくしの身体が変えられてしまう！」

悩乱するスターサンダーの巨乳が上下左右に踊り狂い、肌から汗の雫を四方へ飛ばした。勃起した乳首がギリギリと痛いほど疼き、サイズがひとまわり大きくなる。

「あっおおおお……イクッ‼」

胸の内側から疼痛に炙られているだけで、軽い絶頂に達してしまう。

「イクッうううう‼」

エクスタシーの炎の中にいるスターサンダーの目の前で、美里の身体が浮き上がった。グルングヤラの右手がキャビンアテンダントの制服の胴体をつかみ、軽々と持ち上げたのだ。

空中で美里が自身の手でスカートを腰まで捲って、下半身をあらわにした。ショーツを穿いておらず、むっちりとした尻と太腿が露出する。上半身はスーツの胸をはだけてたわわな爆乳をさらけ出し、下半身は靴下とパンプスだけの煽情的な姿態と化した。

スターサンダーの目の前に、美里の女性器が突き出される。床下から出てきて以来一度も触れていないのに、恥丘の中心は大きく開ききって内側の肉襞や膣口を披露した。クリトリスも痛々しいまでに勃起して、ヒクヒクとわなないている。精細な女の構造物すべてが、透明な体液に濡れそぼり、天井からそそぐ月光を浴びてキラキラと美麗な輝きを放った。

「ああ、グルングヤラ様のたくましい武器を調整いたします」
両手を下へ伸ばし、自分の唾液と獣の精液にまみれた亀頭をつかみ、女性器の位置へ移動させる。
「さあ、どうぞ、美里のいやらしいおまんこを、存分に味わってください」
グルングヤラの右手が無造作に下ろされ、美里の中心に亀頭がズブリッと音を立てて突き刺さった。遠慮も容赦なく巨大肉棒が女性器を限界以上に押し広げ、キャビンアテンダントの体内に埋まっていく。喉と同じように、腹の表面が内側から押し出されて、大きく盛り上がるのが見えた。ひときわ突出した亀頭部分は、すぐにスーツの中に移動した。
地球人の女の肉体で、地球人のペニスをはるかに超える巨大な凶器を受け入れられるのも、ワーストワームに寄生されているからだろう。とはいえ獣棒の太さは受け入れられても、長さをすべて呑みこむのは無理だった。広げられた膣の中に入ったのは全長の三分の一にすぎない。
三メートルの巨躯の腰からそそり勃つ長大なペニスに突き刺さった女体は、両脚が床についていなかった。胴体をつかむ巨腕と牡性器に支えられて、宙に浮かぶ両脚が指を反らして、ピクンピクンと踊っている。
「あひいいっ！　気持ちいいひいッ！」
美里の顔が左右に振りたくられ、髪が大きく広がった。目から随喜の涙があふれて、水滴となって飛び散る。鼻と口のまわりの獣の性汁も、グルングヤラの身体にもどって、黒い剛毛に白い斑点をつけた。スターサンダーにも降りかかってくる。
「イッちゃう！　美里は入れられただけでイッちゃいますうッ!!」
全身の痙攣に乗って踊る二つの爆乳から、またミルクが噴出した。左右の勃起乳首からビュルッ！　ビルルルルッ！　と濃厚な白い体液が飛び散るたびに、美里は絶頂の歓声を叫ぶ。
「イクッ！　おっぱい汁出ていイッちゃうッ！　おっぱいとおまんこ両方イックふうううううッッ!!」
エクスタシーの高熱をはらんだ膣がスターサンダーを見つめた。
「はおううううう、次はレイ様の番ですう、あっあふうう、イクッ！　レイ様もグルングヤラ様に犯されてイク幸せを味わってくださいい」
グルングヤラの太い肉棒の根元の体毛がざわめき、美里に挿入している肉幹の横の位置から、スターサンダーから見て右側にもうひとつの亀頭が顔を出し、ぐんぐんと成長して新たな牡性器が直立した。長大な獣ペニスが二本、左右に並ぶ。
地球にもペニスが二本ある動物はいるし、広大な宇宙では珍しくないことは、スターサンダーも知っている。
しかし今は脅威しか感じない。
「レイ様のほうは副性器なので、はっううううんん、わたしに入れていただいているモノより細くて、おあああ、申し訳ありません」
美里の言葉通り、二本目は長さこそ同じだが、太さは地球人の最大レベルにギリギリ収まっているサイズだった。しかし安心などできない。
（フェラチオをして、精液を浴びせられただけで、胸のワーストワームが凄まじく成長したわ。アレに貫かれ、体内に射精されたら、想像するのも恐ろしい……）
グルングヤラの左手がスターサンダーの頭から胴体へ移動して、美里と同じように持ち上げられる。
「あああっ、離してっ！」
手足を激しくはたつかせ、連続して電撃を発しようとして不発に終わる。それでも必死に暴れつづけるスターサンダーの下半身に、美里の手が伸びてきた。
「はああ、レイ様、じっとしていてください」
美里が太すぎる肉の凶器に貫かれた歓喜の表情のまま、乳首から二筋の母乳をだらだらと滴らせながら、ポケットから出したナイフを器用に動かす。鈍い刃先をスターサンダーのコスチュームの下腹部から股間をくぐって、尻の谷間を登らせた。
ヒーローコスチュームの下半身部分が縦に裂けて、恥丘と肛門が露出する。コスチュームの前面は胸と股間が切られて、かろうじてへその位置だけでつながっている淫猥な状態にされた。
「ああ、レイ様の淫らなところが、とても美しいです」
美里とグルングヤラの視線を受ける恥丘は、精液を浴びて絶頂したために、縦の亀裂がすでにゆるんで、隙間から透明な愛液があふれていた。
「ギュオルルルルッ！」
猛獣の歓喜の咆哮が放たれ、すぐさま剛腕がスターサンダーを、美里の右隣にそびえる亀頭目がけて振り下ろした。
ギチッッ！　と自分の肉の裂かれる音が、スターサンダーの体内に鳴り響いた。濡れた膣内を、赤熱した鉄杭が一瞬で駆け登り、肉幹の三分の一が侵入する。内側から強引に押し広げられて、女体が甲高い悲鳴をあげた。
身体は悲鳴をあげても、声帯は声を出せなかった。衝撃で喉がつまり、呼吸もできず、大きく開いた口の中で舌がヒラヒラと痙攣している。
スターサンダーの両脚も床に届かず、美里の両脚といっしょにゆらゆらと頼りなく揺れた。
（げ、限界……動かれたら、腹が突き破られる……あっ！）
胴体から腕が離され、自身の体重に押されて身体が沈む。亀頭が内臓を貫通する恐怖に襲われ、かすれた悲鳴が飛ぶ。
「ひいっ！」
自分の身体を支える唯一の手がかりになるものに、がむしゃらにしがみついた。それは目の前にあるグルングヤラの胴体。びっしりと生えた黒い剛毛が剥き出しの胸に当たり、チクチクした痛みがいくつも走る。

「うっ！　いっ！　あ、ああっ！」

うめくスターサンダーの前で、美里が獣の腕から離された。キャビンアテンダントの身体がわずかに沈み、両手でグルングヤラの身体にしがみついた。

「やあっ！　刺さります！　ああっ、グルングヤラ様の毛がチクチクして、あおおお、気持ちいいですぅッ！」

剛毛に苦しむスターサンダーとよがる美里に、パドリスの哄笑（こうしょう）がふりまかれる。

「はははははは！　ケダモノに寄生虫のようにしがみついている姿が、レイと美里にはよく似合うぞ！　野蛮な惑星出身の未開人どもにぴったりだ！　グルングヤラ、もっと未開人を喜ばせてやれ！」

「ゴゴゴォォオオルルル！」

豪放な鳴き声を噴き上げて、猛獣が両脚としっぽを使ってダンスのように巨体を揺らした。

「ひいいっ！」

「あはああ！」

スターサンダーと美里は獣ペニスがさらに侵攻してこないように、両手で剛毛を握りしめ、必死にしがみついている。スターサンダーは両脚もグルングヤラの胴体に回そうとしたが、胴まわりが大きすぎて不可能だ。二人の美女の四本の脚がダンスに合わせて、振りまわされてしまう。

「あいいいっ！」

「ほっおおう！」

同時に叫びながら、二人の声音は大きく異なっていた。スターサンダーは太すぎる剛直で内臓をえぐられる苦痛のうめき。美里は地球人の男には不可能な獰猛な快感を与えられて、喜悦に酔い痴れるよがり声。美里の身体とグルングヤラの胴体の間でつぶれる巨大な乳房から、断続的にミルクの飛沫が四方へ飛び散り、黒い剛毛を白く染める。

並んでしがみつくスターサンダーの引きつる顔と胸にも、ビシャビシャと母乳が浴びせられ、乳房の中のワームが激しく暴れる。

「ひいっ、胸も、あっ、あふうぅう！　おおおおっ！」

「あああ、レイ様の音色が変化しています。気持ちよくなっているのでしょう」

「ち、ちが」

違う、と言いたいが、全身を上下に揺さぶられて舌を噛みそうになる。実際、美里は長い舌を噛んでいるが、まったく平気なようだ。

そしてどれほど理性で拒否しても、スターサンダーは自分が気持ちよくなっていることを否定できなかった。鋼鉄のように硬く、溶岩のように熱い亀頭に女体の中心をえぐられるたびに、どうしようもなく苦痛が快感へ変貌していく。

（こ、これもワームに寄生されたから、ああ、わたくしも苦痛と屈辱を快楽と感じるようになってしまうの!?）

そう意識してしまうと、ますます虐待される体内から湧き上がってくる愉悦が増量していく。愛する人と交わっているときのように。

（違うわ！　全然違う！　わたくしは玩具にされているだけ、ああああっ！）

玩具にされている、と意識すると、さらに肉を削り取られるような官能が深まる。否定も、肯定も、拒否も、承諾も、すべて身体を淫らにするだけだ。なにをしても牝奴隷に改造されることから逃れられないというように。

猛獣のペニスに貫かれて、ひたすら回転にしがみついていることが、牝奴隷へと堕ちていく証拠だと認識すると、頬や乳房や腹に当たる黒い剛毛の痛みも、無数の心地よい刺激になる。もう禁断の言葉が喉から出るのを止められない。

「あ、ひっ、ひうっ！　あああ、き、気持ちい」

舌を噛んだ。

「あはああ、レイ様、おっしゃいましたね！　気持ちいいと言われました！　わたしも気持ちいい！」

美里が叫びながら、また大量に爆乳液を噴射して、撒き散らせる。

スターサンダーの屈服の声を聞いて、グルングヤラが勝ち誇った笑いの咆哮を放った。
「ギュフフルルルルルウウッッ！」
裂けたように開いた口から真紅の舌がカメレオンのように伸びて、スターサンダーの肉悦に染まった顔をピチャピチャと舐めまわし、猛烈な憑臭を放つ唾液をなすりつける。鼻腔を苛烈に突く臭いが、さらに性感を高めた。
「イクッ！」
ひと言、スターサンダーが告げた直後に、スーパーヒーローの腹の奥で獣精が炸裂した。
「ゴゴッッオオオオオオオオッッッッ!!」
グルングヤラの射精の遠吠えが、スターサンダーの鼓膜を突き破る勢いで轟く。熱い社マグマが猛烈な勢いで体内を駆けめぐり、血管の一本一本、神経の一筋一筋、細胞の一個一個に染み渡った。
（イクッ!!）
また声を出せない。喉の筋肉が動かせない。全身が精液に浸されてどろどろに溶けて、身体のどこにも力が入らなかった。ただひたすら頭の中で絶頂の言葉が反芻（はんすう）される。
（イクゥッ！　イクイクイクイクイックゥゥゥ――――ゥゥッッ!!）
スターサンダーのぶら下がる両脚の間からは、膣口から逆流した大量の精液が壊れた水道のように垂れ流され、床に落ちて粘つく水音を鳴らした。グルングヤラの腕体にしがみつくこともできなくなり、陸に打ち上げられたクラゲのようにクタクタと倒れかける身体を、横から美里の腕が支えた。
スターサンダーを押さえる美里もまた、体内に収まりきらない獣汁を女性器から滝のように漏らしている。スターサンダーと同時に射精されたキャビンアテンダントも、エクスタシーの言葉を発する余裕がない。大きな白眼を剥き、激面に痴呆のような笑いを煙かせていた。とっさに新人牝奴隷の身体を支える反応をしたのも不思議な状態だ。
言葉を失った二人の女の身体がグルングヤラの両手につかまれ、まるっきり男用の淫具を引き抜くように持ち上げられた。そのまま不用物として投げ捨てられ、精液に濡れた床にピチャリと落とされる。普段のスターサンダーなら難なく受け身を取って立ち上がるところだが、今は身体が痺れて、後頭部を床に打ちつけてしまう。
グルングヤラがもはや女たちに興味なしとばかりに背を向けて、出てきた階段をのしのしと下りていく。偉大な英雄の退場を見送るように、立体映像の観客たちが大きな拍手と称賛の声を浴びせる。
黒い巨体が完全に床下に消えると同時に、闇クラブを再現した立体映像のスイッチが切られた。
もとにもどった床に、スターサンダーは横たわったままで、うめくしかできない。
「ううううう……」
上から異母兄が覗きこんできた。
「ははは。レイ、ケダモノとセックスして、射精される気分はどうだ。いい心持ちだろう」
「だ、黙れ！　わたくしは、ひきいいいっ！」
自分の意志では動かせなかった身体が、激しく反り返った。胸の中のワーストワームが今まで以上に過激に暴れ出した。
「あがっ！　あおおうっ！　はっくあああああ！」
（作り替えられる！　わたくしが別のものに改造されてしまうっ！）
苦痛はない。ただ自分が自分でなくなるという凄まじい恐怖と、体験したことのない快感が、全身を痺攣させている。
床の精液を波打たせてのたうつスターサンダーを、パドリスと美里が両側から覗きこんで声をかけてきた。
「レイ、立派な俺の牝奴隷になるんだぞ」
「レイ様、すてきな牝奴隷の世界へようこそ」
「ああああっひいいいいいいい――――ッッッッ!!」
スターサンダーの耳は自分の絶叫にふさがれて、二人の声が入らなかった。

第五章　牝奴隷肛悦レース

三十分あまりも胸の中を異常な乳悦が吹きすさび、スターサンダーは白い精液だまりの中でのたうちまわった。

ワーストワームの狂乱が鎮まるとともに、グルングヤラに犯された疲労が素早く消えて、体力が回復した。この活力も寄生生物がもたらした効果かと思うと、立ち上がる気が起こらず、床に横たわったままでいた。

「レイ様、次は牝奴隷璃奈で遊ぶのです」

いきなり視界にナースの西村璃奈の白衣姿が入ってきて、右手でスターサンダーの左手をつかみ、強引に引っぱり上げて立たされた。

「レイ様には、璃奈の長い牝奴隷生活のなかで、最も愉快なお遊びをしてもらいます」

外見は二十代半ばの璃奈は、実際の年齢にふさわしくベテランナースらしいキビキビしながら重みのある口調で告げる。提案ではなく命令という調子だ。美里の蠱惑的な口調とは対照的な発声を聞いていると、同じ牝奴隷とは思えない。

「璃奈さんもワーストワームに」

「もちろんです。璃奈も寄生されています」

堂々と応じるナースの態度に、スターサンダーは困惑させられる。

「では、璃奈が感染マフマで参加した人間レースで楽しみましょう」

璃奈のかたわらの床が開き、奇妙なものがせり上がってきた。形は手袋とハイヒールだが、銀色に輝く金属でできている。璃奈はナース用の白い靴を脱ぎ、銀のハイヒールを履き、銀の手袋をはめた。そして身体を前に倒して、膝を床につき、銀の両手を床に置いた。

璃奈が着ているナースの白衣は、ワンピースの裾が膝下まである普通のデザインだが、四つん這いになると、むっちりと豊満な美尻の形がくっきりと浮かんだ。白い布のどこにもショーツのラインが浮かばず、下着を穿いていないとはっきりわかる。

ボリュームたっぷりの尻に引っぱられて裾が持ち上がり、両脚が膝の上まで覗いた。

おそらくはノーブラの乳房が重力に引かれて、胸の白布をつっぱらせる。

四つん這いになった璃奈が、スターサンダーを見上げる。

「レイ様、わたしの背中にまたがるのです」

「ええっ！」

「またがりなさい！」

「でも、そんなことは……わたくしの身体は汚れているし、コスチュームの股間が破れたままだわ」

ピシッという打撃音が鳴り響いた。音源に顔を向けると、パドリスがいつの間にか乗馬用の鞭を手にして、にやつきながら床を叩いている。

「レイがまたがらないと、璃奈が罰を受けることになるぞ。この鞭で尻を百叩きの刑だ」

「……わかったわ」

意を決して、右脚を上げて白衣の背中にまたがり、収まりのいいウエスト部分に股間を乗せた。裂けたコスチュームから剥き出しになっている恥丘が璃奈の背中に押しつけられて、自身の愛液と獣の精液が混ざったものが白衣に染みこみ、色を変えた。

「ああ、恥ずかしい……」

知らない人が見れば、スターサンダーがナースを馬にして虐めている状況だが、スターサンダー本人は燃え盛る羞恥心に苛まれている。女を馬にして、自分の恥ずかしいもので汚れた下半身を乗せるなど、恥辱をさらしているだけだ。

「それでは、ハミを璃奈の口にはめるのです」

ナースがポケットから出したものを、スターサンダーの手に押しつけた。ハミとは、乗馬のときに馬の口に咥えさせる馬具だ。ハミの両端に手綱をつけて、騎手が馬を操る。

渡されたものは馬用の金属製のハミと異なり、細くて柔らかい材質の棒の両端にリングがあり、手綱が結んである。

「人間に八ミをつけるなんて、そんな虐あつかいはできないわ！」

「璃奈は馬です。馬には八ミが必要です」

前を向いたまま冷静な言葉を吐く璃奈の姿が、スターサンダーを戦慄させた。またピシッという音が聞こえてくる。しかたなく両手を璃奈の顔の前にまわして、八ミの棒を唇に当てた。口が開き、八ミを強く噛みしめる。本物の馬は前歯と臼歯の間に歯がない部分があるので、八ミを咥えても奥に当たらないが、人間だと噛みしめざるをえない。

「これでいいの？」

「よろしいです」

八ミを噛んでいるのに、声がモゴモゴしないで鮮明に聞こえた。八ミそのものに音声を補正する装置がついているのかもしれない。

「マフマ星の奴隷遊園地名物の人間レース、ゲートインします」

ナースが四肢にはめた銀の手袋とハイヒールが変形した。手首と足首の先を包みこみ、細長い棒状に変形して、白衣の身体を高く持ち上げる。璃奈は身体を床に対して水平にして、手足を下へ向けた姿勢で、四本の棒の上端に乗っている状態になった。スターサンダーも観た地球の有名な舞台劇で、大きな四足動物を演じる俳優のようだ。

璃奈の背中にまたがるスターサンダーは、サラブレッドの背中に乗るよりもさらに高くなった。当然、両足は床につかず、思わず口の八ミから伸びる手綱を握りしめた。

「あの、わたくしの体重がすべて璃奈さんにかかっているわ。大丈夫なのかしら？」

「改造牝奴隷なので問題ないです。奴隷遊園地ではもっと重い騎手を何人も乗せて出走しました。でもレイ様を安定させるために、もうひとつ綱を用意します」

スターサンダーの背後から、ズルズルという音が聞こえた。ふりかえると、白衣のスカートが尻の谷間よりも上にたくし上がり、立派な雲髪が全開に露出している。

尻からは、本来は地球人の肉体には存在しないものが伸びていた。

猿ならしっぽが生えている位置から、一本の白い触手がうねっている。美里の乳首の中から現れて、スターサンダーの乳首の奥に侵入した触手と同じ。

（この触手が、ワーストワームに寄生された印なの⁉）

「挿管します」

璃奈の前の口から医療用綿が出て、後ろの触手が背中に乗るスターサンダーの剥き出しの尻の谷間に滑りこんでくる。

「ひあああっ！」

体験したことのない不安定な体勢では逃げようもなく、肛門に触手が押しつけられた。反射的に肛門括約筋をきつく締めたつもりだったが、触手のノックに体内に潜む寄生生物が応えたようにゆるんでしまう。

ニュルッ！　と、触手が尻の中に突入してくる。

「あああ、あおおう！」

アナルセックスははじめてではない。信頼する人に肛門への愛撫を施され、また悪党から尻を陵辱された。すでに尻の快感を熟知している。強くうねりながら躊躇なく腸の奥へ侵攻する触手に、たちまち深い快楽を掘り起こされた。

「おっう、お尻が！　お尻が気持ちいいっ！」

「牝奴隷として素直になっています」

周囲の光景が、新たな立体映像に変わった。地球の競馬場によく似た施設の風景が現れる。競馬場の観客席を埋める人々のざわめきや、場内に流れる軽快な音楽も聞こえる。

スターサンダーと環奈がいるのは、緑の芝が青々と生えるレース用コースの中央。

二人の左右にも、同じように馬になった女たちと、その背中に騎乗する女たちが、何組も出現した。馬と騎手を務める女たちは、全裸もいれば、趣向を凝らした工口い衣装もいる。馬上の騎手たちは皆、馬役の女の背中に装着した鞍から生えるペニス型淫具を、深く膣や肛門に挿入した状態で騎乗している。

馬役はこんな不自然な体勢で大人の女を乗せているのだから、やはり肉体の強化をしているのだろう。しかし環奈のように触手で騎手を貫いている馬役はいない。ワーストワームに寄生されているのは環奈だけらしい。

獣姦を見世物にするのはおぞましいことだが、まだスターサンダーの想像の範疇にあった。しかしこの人間レースの光景は想像を絶している。

「これがフィクションではなく、現実の映像なの？」

「ええ。環奈もこのレース場で何度も走ったのです」

「こんなことが実際に行われているなんて、あまりに酷すぎるわ」

嘆くスターサンダーの耳を、出走を告げるサイレンが叩いた。

「ハッ！」

環奈が気合を発し、手足につけた銀の偽蹄を自分の肉体のように動かし、人間が普通に走るよりも速く駆けだした。同時に左右に並ぶ女の競走馬たちもいっせいにめらかに走りだす。女たちがどれほどの過酷な訓練を積まされれば、かくも不自然なことを自然にできるようになるのか、スターサンダーには想像もつかない。

走りだすと同時に、スターサンダーの全身が大きく揺さぶられた。足を乗せるあぶみがないので、まともに身体を保持することもできない。落馬しないのは、環奈の触手が肛門から腸の奥まで貫き、つかまえているからだ。同時に、揺れるたびに尻の中で触手が暴れまわり、スターサンダーは苛烈な快感で休みなく責めたてられる。

「あくっ！　ふあああっ！　お尻がっ！　おおおおお、お尻がああああっ！」

まわりの立体映像の女騎手たちも、馬が走る振動で淫具に攻撃されて、喘ぎ、悶え、よがりながらレースをつづけている。大勢の騎手が垂らす涎と愛液が、コースの芝を濡らして、緑の色をいっそう鮮やかに変えていく。

早くもエクスタシーを極めた女騎手が次々と現れ、高い嬌声が続けざまに上がった。

「イクッ！」

「イクうう！」

「イッちゃう！」

「イキますう！」

多数の女たちの喘ぎ声に包まれるなかを、環奈はトップで走っていた。実際には宇宙船内の大ホールだが、立体映像が作る錯視によって長大なコースを走っているように感じられた。

「レイ様、次のコーナーをまわったら、環奈のワーストワームを施術します」

「えっ、なにを」

聞き返したときには、もう環奈は他の女馬に先駆けてコーナーを走破していた。後ろから絶頂を訴える声が艶めかしく追ってくる。

「あああっ、落ちるう、あひっ！」

斜めになったナースの身体に、スターサンダーは懸命にしがみつき、肛門に白い触手が埋まった豊美尻を高く掲げる。尻の中では触手が暴れて、腸粘膜をしごき、大きな歓悦をえぐり出していた。

「あっおおおう！」

今はいじられていない女性器が、肛門の悦びを反響させて、新たな愛蜜をプシャアッ！　と噴き出した。透明な蜜飛沫がナースの制服と尻を濡らし、肌の色をあらわに透かした。さらに蜜液が二人の背後の空間へ、キラキラと飛散していく。

そんなさなかに、腸の中の触手が紐状の子供を吐いた。

「くふあっ！」

乳房に寄生されたときと同じように、尻を犯される快感が一気に高まる。スターサンダーの尻が激しく踊って、環奈の尻に何度もぶつかり、打撃がさらに大きな悦楽の反響となって尻の中にもどってきた。ピシャ、バシャ、と膣口から濃い飛沫が飛び散り、コースを濡らす。

二人分の寄生生物に侵された女体には、官能の昂ぶりをとどめる術は存在しなかった。たやすく限界を超えてしまう。

「イクッ！」

スターサンダーは両手の手綱をきつく握り締めて、絶頂の叫びをあげる。

「イッちゃう！　お尻がイックううううッッ!!」

白い触手を咥えている尻の穴から、いきなり透明な液体が噴出した。触手に広げられた肛門の縁が、盛大に噴き出る体液に振動させられて、連続しておならをするような音が激しく鳴り響く。

ブリュ！　バリュュ！　ビッビリリリリリリリリッッ！

「なに!?　お尻から、なにかが出てるっ!?」

もちろん、自分の肉体がこんな異様なエクスタシーの反応をするのははじめてだ。そもそも腸の中にこれほどの量の体液を分泌する器官が存在しない。これもワーストワームによる寄生改造のせいだ。

「あああっ、出るう！　お尻から何か出るのが気持ちいいのッ！　ひあああ、気持ちいいイイイイッッ、もっとお尻がイックううううッッ!!」

まるで男の射精のように、あるいは美里が爆乳の肉筒から射乳するように、肛門から未知の体液が噴き上がるたびに、背筋が蕩けるような快感が走った。そして快感が走れば、また新たな尻の射出がくりかえされる。尻絶頂と尻噴水のループができあがり、走る瑛奈の上から尻液と愛液が後ろへ流れていく。

バリリ！　ブリシュウウ！　ドビルルルッル！　ビシャア！

止むことなく鳴りつづける尻の噴射音を聞かされて、スターサンダーはついふりかえった。自分の肛門から流出する液体が、後続の女馬と女騎手たちにビシャビシャとふりかかるのが見える。立体映像が即座に反応して、女たちの姿がびしょ濡れに変化していく。濡れた女騎手たちが、さらに美貌を濡かせ、あられもなく見せつける巨乳を大きく弾ませて、イクッ！　イッちゃう！　イキます！　と口々に叫んだ。

自分が排泄した体液を浴びる女たちを目にして、立体映像だとわかっていても、スターサンダーは羞恥と情けなさに身を焼いた。

「あああああ、かかっているわ！　みんなにかかっている！　あひいいい、なんてことを！　おおっ、はっおおううう！　イクッ!!」

どれほどみじめな恥辱を味わおうとも、異常な肉悦の堂々巡りを止めることはできない。身体がコントロールを離れて絶頂の暴走をしている。

「イクうっ！　あふゅあ、止まらないひ！　イックう！　おっおおほほう、狂っちゃふう！　お尻がイキ狂ふゅううううううッッ!!」

イキながら瑛奈の身体にしがみつき、コースを何周もまわる。

連続絶頂によってドロドロと沸騰する熱泥と化した脳内に、ふいに聞き慣れないサイレンが鳴り響いた。瑛奈が器用に急制動をかけて停止する。人工音声のアナウンスが映像のレース場に轟いた。

「優勝はレイ騎手と瑛奈号！」

瑛奈の四肢に装着した銀の義足が縮まり、手袋と八イヒールにもどると、床に直接四つん這いの姿勢になった。スターサンダーはよろやく両足が床につくと、バランスを崩して、ナースの背中から横へ倒れる。

床に伸びるスターサンダーの肛門から、白い触手が勢いよく引き抜かれた。ピッシャアアアアアア――――ッッ！　と、大量の尻液が消防車の放水さながらに飛ぶ。

なかば意識を失った身体がビクビクと痙攣して、唇から不明瞭なかすれ声をこぼした。

「ぁぁあぁぁぁ、イク……ク……」

スターサンダーの周囲でも、遅れてゴールに到着した女馬から女騎手たちがどさどさと芝に落下した。全員が快楽に痺れる身体をのたうたせて、淫具が抜けて開きっぱなしの女性器から愛蜜を流している。

「いいぞ、レイ。また一段と牝奴隷化が進んだな」
バドリスが軽快に笑い、乗馬鞭で異母妹の汗に濡れた尻肉を打ち据えた。
スターサンダーは新たな鋭い刺激を受けて、ただ尻をうねうねと揺らし、肛門と膣口から蜜をあふれさせるのみだった。

第六章　牝奴隷に咲く淫らな花園

スターサンダーの尻が鎮静して、泥沼に沈んでいた意識が浮上すると、忌まわしい人間レース場の立体映像が消えていた。
代わりに、目の前に立つ若い女が告げた。
「清風大学教育学部の教育実習生、高橋梨花」
「三人目の……」
梨花は飾り気のない白いブラウスに、モスグリーンの膝下までのスカート、白い靴下に黒いパンプス、という新人女教師らしいファッション。
ただしブラウスはバストの形状が露骨に見て取れるデザイン。ウエストもスカートがぴっちりと押さえ、太腿のラインがはっきりとわかる。こんな格好で中学や高校の教室に入ったら、男子生徒たちが大興奮するに違いない。
梨花は、サンダークラップスのチームメイトのフレアに近い年齢に見えた。もっともフレアも外見通りの年齢ではないけれど。そして母の恵美が父のイトアと出会ったころの年齢だ。宇宙海賊に拉致されたときに、梨花と恵美はともに女子大生だった。
梨花の顔には最初の無表情と違って、スターサンダーが知る言葉では表現できない感情が噴き出して見えた。
「レイにいいものを見せてあげる」
梨花が右手をスカートのポケットに入れて、ボタンのような形の物をつかんでスターサンダーの顔の前に差し出した。人差し指と親指につままれたボタンから光が出て、一枚の静止画像が投影される。
それは飛行機の座席に並んで座る二人の若い女の、楽しげな自撮り画像。
ひとりは梨花。もうひとりは恵美。二人とも笑って、右手に持つ同一のキーホルダーを カメラへ向けて突き出している。
スターサンダーは息を呑み、やがて声を絞り出した。
「母から聞いています。梨花さんとは飛行機のとなりの座席で、すぐに意気投合したと」
「そう。恵美とはたまたま隣の座席になって、奇跡のように意気投合した。恵美もわたしもアメリカで大好きな映画監督の新作を見たばかりで、二人ともグッズを持っていて、記念に写真を撮った」
画像の二人が持つキーホルダーはリアルなゴリラの人形で、映画のタイトルロゴらしい英語を記した看板を抱えている。
「母は」
「わたしがいたから、海賊艦の中でもがんばれた、と言っていた」
梨花の言葉に、スターサンダーはうなずいた。
「その通りです」
「娘のレイも、そう思えるようにしてあげる」
若き日の母親の顔を貫いて、白い触手が飛び出した。
「ああっ！」
梨花の右の手のひら伸びた触手が素早く動き、床に尻をつけたスターサンダーの股間に滑りこんだ。開いたままの女性器の中の一点、女の身体で最も敏感な部分に吸いつかれる。ずっと勃起したままの陰核全体が、柔らかくも強靭な触手の先端にキュッと包みこまれた。
「ひいいっ！　クリトリスがあっ！」
バネのように立ち上がったスターサンダーを、梨花が両腕で抱きしめた。剥き出しの下腹部とモスグリーンのスカートが密着する狭間で、触手が精密に轟き、しこり勃った肉芽を揉みたてる。
「あひ、それっ！　ひおおうっ！」
クリトリスを揉みほぐされるという、ある意味あたりまえの愛撫と快感のなかで、普通ではない衝撃が走った、触手の先端から針のようなものが出て、陰核を貫き、体内に潜りこんでくる。スターサンダーにとっては、異常ではあるが、もはや未知ではない攻撃だ。
美里の触手から二つの乳首に挿入されたものと同じ。
「入ってくる！　三人目のワーストワームに寄生されちゃう！　きゃひいいい！」
三度目の体験でもまったく慣れることができない、身体を内側から破壊されるような快感が小さなクリトリスから全身に、何重もの衝撃波となって広がる。何度極めたのかわからない連続絶頂のために、すでに限界まで膨らんでいると思えた肉粒が、さらにグッグッと大きさを増していく。
小指の第二関節ほどまで肥大した女の芯から触手が離れると同時に、梨花に抱きしめられたスターサンダーは叫んだ。
「イクううっ!!」
クリトリスの中に残された紐状の寄生生物がクネクネとのたくり、絶頂がさらに高みへと押し上げられていく。
「きひいいい、イクイクイクふうううッッ!!」
ビシュュ！　ビシャアアッ！　震える肉芽の下から女蜜が噴き出し、梨花のスカートを濡らし、染み入った。
「レイったらすごい潮を吹いてる。母親と、恵美と、同じくらい感じやすいのね」
「はああ、ど、どういうこと？」
「海賊艦にいる間、わたしたちが何もされなかったと思うの？　奴隷商人に売られる前に、海賊たちに散々味見をされた。わたしも、恵美も」
「そんなことは……」
母親は言わなかった。
（でも、あって当然のことだわ。父様もそれを承知で結婚されたに違いない）
「わたしと恵美が二人並んで、ながよく海賊たちのペニスを舐めた。レイと美里がグルングヤラにフェラチオしたみたいに」
「……」
「本当ならわたしと恵美はコンビの牝奴隷として売られて、ずっといっしょにいられた。そういう売買契約だったのだから。それなのに海賊の艦長が恵美を気に入って、売らないと言い出した。わたしたちは引き離されてしまった」
ふいに梨花がにっこりと微笑み、スターサンダーを抱きしめながら童顔にふさわしい笑顔を見せる。
「これからはレイがずっと、わたしといっしょ」
恵美の娘の顔を正面から見つめて、笑顔がどんどん明るく輝いていく。
「わたしとレイはずっといっしょに、牝奴隷として生きる」
「間違っているわ」

スターサンダーは母の友を見つめ返す。
「わたくしが、サンダークラップスが、梨花さんを救出するわ。美里さんも、瑛奈さんも救出して、地球へ帰りましょう。地球以外の惑星でも、どこの宇宙ステーションでも、梨花さんたちが行きたいところへお連れするわ。母に会いたいのならば、シャウナにも行く、はっ！」
密着する二人の足もとの床に、二本の剣が突き立った。両刃の細身の剣だ。
反射的に身体を離して、剣が飛んできた先に顔を向ける。
「な、なんなの……？」
スターサンダーは唖然として、視線の先にいる人物を見つめる。
パドリスが今まで着ていたジャラジャラした軍服風衣装を脱ぎ、全裸になっていた。両手を腰に置いて、誇らしげに胸を張っている。
スターサンダーが最後に実母兄の裸身を見たのは、子供のころのプールだった。そのときのパドリスはトランクス型の水着を穿いて、体格は痩せてもいないし、たくましくもない、ごく平均的な十代の少年の身体つきだった。
現在、目の前で堂々と全裸身をさらしている。地球でいうドヤ顔だ。
確かに素晴らしい肉体美だった。力強く引きしまった筋肉は、実践的に鍛え上げたアスリートや武術家のもの。股間からまっすぐにそそり勃つ男根も、発達した大胸筋や腹筋、大臀筋や大腿筋に比べて遜色のない立派なサイズ。
とはいえスターサンダーが知るパドリスは、地道に鍛練を積むような性格ではない。
「肉体強化処理を受けて適った身体ね。見栄っ張りのパドリス兄さんにはふさわしいわ」
「合理的と表現しろ。手軽に強くなれるのに、何年も努力するなど愚の骨頂だ。そもそもレイの電撃こそ、なんの努力もしていないで手に入れた生まれつきのミュータント能力だろうが」
スターサンダーが生まれつき持ってしまった能力を制御するまでに、どれほど苦労したのかを、パドリスは見ていた。しかし、自分の中でなかったことにしているのだろう。
スターサンダーは気づいた。パドリスが男性器も尻も丸出しのくせに、臍には大臍をシンボル化したシールを貼っている。惑星シャウナ全体が統一国家になる前に、オル家がある地域を支配した国の紋章だ。
（パドリス兄さんは古代シャウナの国家代表の剣闘士のコスプレをしている。国家剣闘士が臍の紋章以外はなにも身につけないのは史実だけど、あの太陽の紋章が使われていた時代には、とっくに国家剣闘士なんて存在しなかった。歴史がデタラメだわ）
パドリスが右手を前に出すと、床に穴が開き、抜き身の剣が柄を上にして飛び出した。凝った造形の柄を右手で握ると、恰好をつけて高速で剣の型を披露する。
「レイと梨花も剣を取れ。梨花の得意な見世物をやるぞ」
「パドリス御主人様のお望みのままに、悦んでお受けいたします」
梨花が剣を引き抜き、右手で構えた。女教師スタイルとはミスマッチだが、身体の動きは剣と一体になったように美しく決まっている。
「なかなか様になっているだろう。梨花は惑星ソーズの エロ闘技場で闘う牝奴隷として活躍していた。そうだな」
「仰る通りです。様々なスタイルで闘ってきました」
語る梨花の瞳が頭上の大きな月を見上げて、何光年もの彼方を見晴るかす。表情が凍み、手にした剣を淫具のようにあつかい、刃の側面を白いブラウスを持ち上げるバストに這わせる。
「はああ、女奴隷同士で闘い、勝利すれば相手をペニスバンドで犯して、ああ、何時間もよがらせました。はっんんん……敗北すれば、わたしがペニスバンドで犯され、前の牝穴も、後ろの尻穴も、たっぷりとイカされました……」
剣をくるりと回して、柄の後端をスカートの下腹部に押しつけ、布の上で円を描く。
「……あふ、ふうんんん、男の闘士とも闘いました。勝てば、闘士を跪かせて、口でわたしの女性器と肛門に奉仕させ、おしっこを浴びせて、飲ませてやりました……おおう、わたしが負ければ、何人もの男に輪姦されました。身体中に肉棒を押しつけられて、全身に精液をすりこまれて、吐くほど飲まされました。あああ……」
柄を布が破れる勢いで股間部分に突き入れて、尻を妖しく踊らせる。スカートから伸びる両脚がガクガクと震えて、ブラウスの膨らみが大きく弾んだ。
梨花の淫靡な剣舞を前にして、パドリスが勃起を誇い立たせた。
「レイも剣を取って、俺と闘え！　真のシャウナ人の男の強さを叩きこんでやる！」
スターサンダーが剣を取る前に、梨花が前へ跳び出した。
「わたしが先に参ります」
梨花もまたワーストワームに寄生されて、身体を強化されている。そのスピードはオリンピック中継で見る各国代表のフェンシング選手を超えていた。しかもまっすぐに突進するのではなく、足を巧みに使い、トリッキーな動きでパドリスの右側面から切りかかった。ついさっきまで自慰をしていたと思えない動きだ。
「はぁん」
と、上から目線の声を発してパドリスが身をひねり、右手の剣で梨花の一撃を跳ね飛ばした。
「おのれ！」
梨花はパドリスの周囲を軽快に駆けまわり、まさに蝶のように舞い、蜂のように刺す攻撃を、凄まじい速度で連続させる。そのすべてを目で追うことは、スターサンダーには不可能だった。
攻撃のすべてを、パドリスが軽々とかわし、避けて、剣で受け流し、弾き飛ばす。剣と剣が何度もぶつかる金属音がリズミカルに響き、パドリスの腹の前で亀頭が右に左に華麗なダンスを踊る。
やがてスターサンダーは気づいてしまった。
（八百長だわ！）
単純な筋力なら、パドリスが優っているかもしれない。しかし動きは梨花のほうが上だ。どれほど闘技場で闘いを重ねたのか知れないが、梨花の剣技は地球の剣士スタイルのスーパーヒーローに優るとも劣らない。
（梨花さんは、パドリス兄さんを斬ろうと思えば斬れるわ。わざと避けられるように、剣で受けられるように、計算して攻撃している。あっ！）

バドリスの剣が一閃して、梨花の手から剣が飛ばされる。高く翔ける剣が床に落ちる前に、バドリスが突いた剣先が、梨花の喉に触れる。あと一センチでも剣が前に動けば、喉の肉に潜りこみ、鮮血があふれるだろう。

すべては梨花がお膳立てをした展開だが、梨花が膝をつき、額を床にすりつけて土下座をする。

「降参です、バドリス御主人様。わたしの完敗です」

勝利をプレゼントされたバドリスは、かけらも恥じることなく、満天下に自分の実力を示すがごとく言い放った。

「当然だ」

右手に剣を握ったまま、裸足の右足の裏を土下座したままの梨花の頭に乗せた。梨花の頭上で男根が傲慢に揺れて、女を踏みつける快感に酔っていた。

梨花が頭に足の裏を乗せたまま、わずかに上体を床からもたげて、白いブラウスのボタンをはずしはじめる。

「どうぞ敗者をご自由になさってください」

「やめて！」

スターサンダーは右手で床から剣を抜き、異母兄へ向けてダッシュした。前もって決められていた茶番劇だとわかっていても、感情のほとばしりを止められなかった。

他人を貶めて支配することを快楽とする最も唾棄すべき姿を、悪党たちとの闘いで何度も見せつけられた。その最低の外道に、自分と血を分けた家族が堕ちてしまった怒りを止められない。ましてや相手は自分の母の友人だ。我を忘れて剣を前に出して突き進み、喉が裂けんばかりに叫んだ。

「恥を知れ！」

「俺に恥ずべきことなど微塵もないぞ」

バドリスが梨花の頭を踏みつけたまま、わざとらしくすました顔で剣を振るう。

いとも簡単にスターサンダーの手から剣が飛ばされた。バドリスが梨花相手に八百長をして勝ち誇る卑劣漢とはいえ、強化された肉体の剛力とスピードにはとてもおよばない。やはり電撃を使えなければ、武術を習った普通の人間でしかないのだ。

スターサンダーの巨乳の谷間に剣先が挿し入れられ、冷たい刃が柔肌に触れる。

バドリスが凶悪な笑みで、顔を歪めた。本人は偉大な勝者の優雅な笑顔のつもりかもしれないが、スターサンダーには異母兄が本物の悪魔に見えた。

「レイもひざまずけ。額を床に叩きつけろ。梨花と並んで土下座して、真のシャウナ人であるバドリス・オル様の前に、未開人がみじめに敗北したと宣言しろ！　俺に謝れ！　謝るんだっ！」

しゃべっているうちに自分の言葉で昂り、眉を限界まで吊り上げ、口から唾を飛ばしてわめくバドリスへ、スターサンダーは冷徹な声を返した。

「わたくしこそ、バドリス兄さんに謝罪することなど、なにひとつ存在しないわ」

「クソが！」

バドリスが怒りを暴発させ、感情に反応した筋肉が剣を突き出した。

スターサンダーは目撃した。鋭い剣先が、自分の乳房の間の肌に入りこむのを。バドリスが自分のした予定外のことに驚いて剣を引くと、肌に残された傷から赤い鮮血が滴る。

「ああああっ！」

スターサンダーは思わず声を発していた。

苦痛の声ではなく、快楽の声を、血とともに流していた。

生々しい傷からあふれているのは、痛みではなく、間違いなく快感。乳首やクリトリスを愛撫されるのと同じ肉の悦びが、切られた肉からスクスク発している。

（なに？　なにが起きているの？　どうして気持ちいいの？）

「どうした、レイ？　なんだ、その反応は？」

傷と血を挟んで困惑する兄妹だが、先にバドリスがニッと笑った。

「そうか！　そういうことか！　レイはついに俺の牝奴隷に成り下がった。それも最低の牝奴隷にな！」

バドリスの剣がまた閃き、スターサンダーは右の脇腹をコスチューム ごとわずかに斬られ。新たな傷口から血が出るとともに、また痛みではなく愉悦が噴き出す。

「あひ！」

わけがわからず右手で脇腹を押さえると、指先が傷に触れて、さらに強い気持ちよさが走る。まるで自分の手で性感帯をいじってオナニーをしているように。

「あっ、はあああ……」

思わず身体がくねり、乳房の間から血液が滴り落ちて、足もとの床に赤い点を描いた。

「レイに教えてやろう。ワーストワームは牝奴隷の体内にいるものが、別の女の体内に子供を植えつけて増えていく。子供の植えつけは一対一が決まりだ。美里からレイの胸に入った二匹は、一匹の子供が二つに分裂したものだがな。ワーストワームは牝奴隷ひとりにつき、一匹だけを寄生させるものだ。なぜだか、わかるか。ひとりの女に二匹のワーストワームの子供を植えつけると、女の身体がどうなるのか、予想もつかないからだ。たいていは精神を破壊されて廃人になるか、身体の変化が暴走して怪物になる。牝奴隷としては使いものにならん」

「そんなものを、わたくしに三匹も植えつけたの！」

「そうだ。レイの身体に三匹のワーストワームが寄生している。レイを怪物に変えて飼ってやろうと思っていたが、それ以上の成果だ。おまえは身体を傷つけられると苦痛のかわりに快楽を感じる怪物になった！　そういう異常な症例もごく稀にあるとは聞いていたが、それを引き当てるとはレイは実に幸運だな！　痛みを快感だと思うマゾヒストではないぞ。そもそも痛みがなくなったのだからな。これこそ最高にして最低の牝奴隷だ！」

スターサンダーは思わず視線をめぐらせて、梨花を探した。

三人の牝奴隷は少し離れたところに並んで立っていた。最初に床下から現れたときと同じく無表情で、瞳は遠い星々の彼方を見ているよう。スイッチを切られたロボットにも見える。

（梨花さんたちを責めることはできないわ。三人とも海賊や奴隷商人、なによりバドリスの犠牲者たもの）

あらためて異母兄へ視線を向けたスターサンダーの前で、剣が踊った。

「さあ、もっと気持ちよくしてやるぞ！　ははははは！」

高笑いとともに二度三度と剣が動き、逃げようとするスターサンダーの左の脇腹、右の太腿、左の二の腕に傷が開いた。次々と血が流れ、新たな快感の源泉が噴き出す。

「くっ！　あ！　あふっ、うっんんんん！」

麻薬のような複数の快感が全身に広がり、脚に力が入らずに立ちつくしてしまう。普通の肉体の悦楽は触れられているときだけに現れるが、身体を傷つけられた痛みは癒えるまで消えない。痛みが変異した快感は、傷があるかぎり続いていくのだと思い知らされた。

「そら、倒れろ！」

「あぐっ！」

強化した足で容赦なく腹を蹴りつけられ、スターサンダーの身体が後ろに飛び、背中を打ちつけると、そのまま床を滑った。衝撃を受けた腹も、叩きつけられた背中も、切り傷ほど激しくないが、じんわりと心地よさが染みこむ。

「あ、あああ……んんん……」

喘ぐスターサンダーの両膝をバドリスにつかまれ、大きく割り広げられた。M字を描く両脚の間に異母兄が膝をつき、淫欲をたぎらせた顔で股間を見つめてくる。

スターサンダーは顔を引きつらせ、怒声をバドリスへぶつけた。

「なにを考えているの！　わたくしたちは血を分けた兄妹なのよ！」

「レイは妹でも家族でもない。未開人の牝奴隷だ！　牝奴隷を犯すのは主人の義務だからな！」

「この！」

果敢に殴りかかる異母妹の顔面に、バドリスがためらうことなく拳を叩きこんだ。また背後に倒れるスターサンダーの両腕と頭に、美里、環奈、梨花の六本の腕がからみついて、身動きできなくされる。

三人ともついさっき目にした無表情の顔ではなく、淫靡な笑みをたっぷりと浮かべて、スターサンダーの耳に甘ったるい言葉を流しこんできた。

「レイ様、バドリス御主人様に犯されてください」

「バドリス御主人様に犯される幸せを、レイ様も味わうのです」

「いよいよレイ様が、バドリス御主人様に犯される番」

牝奴隷として身も心も改造され調教されている喜動にゾッとするが、三人を責める思いは生まれない。ただひたすら背筋が凍りつく思いがした。

その恐怖も戦慄も、女たちの指先が二の腕や左右の脇腹の傷口に挿し入れられて、肉をほじくるように動かされると、あっさりと霧消した。指が動くたびに鮮血と快感があふれ出て、全身の神経を走りまわる。

「あひいっ！　くふあ、はっうううっ！」

ありえない悦楽に乗って剥き出しの巨乳がふるふると踊り、尻がくねって床にこすれる。

異母妹のセクシーなダンスを目の前で鑑賞して、バドリスが下卑た笑いをあげた。

「傷をいじられるのがたまらないようだな。こっちの傷はどうなっているんだ？」

百八十度近くに大開脚させられた股間を、バドリスの視線が舐めまわす。すでに大きく花開いた女性器は、肉襞が充血してぶりぶりと膨らみ、ひとりでにざわついている。梨花のワーストウームに刺されたクリトリスは親指の先端のように膨張して、ピクンピクンと震えている。中心で大きく広がっている秘孔からは、断続的に女蜜が吐き出された。

濡れそぼる女の肉花全体から芳醇な淫香が立ち昇り、バドリスの嗅覚を楽しませた。陰乳が広がるとともに、亀頭が激しく前後に動き、割れた腹筋を打ち鳴らす。

さらに環奈の寄生生物を呑まされた肛門も、呼吸をするかのように弛緩して開いてはキュッとすぼまって、開閉をくりかえす。閉まるたびに、随喜の涙のように体液がこぼれ出た。

バドリスが視線を上げれば、満々と張った二つの豊満乳房が揺れている。美里から二つに分裂したワーストウームの子供を挿入された乳首は、今にも破裂しそうに高く太く屹立した。

「ははははは。三匹のワーストウームのおかげで、レイの身体のどこもかしこも弄りきっているぞ。こうしたら、どうだ。シュニ、針はよこせ」

シュニの名はスターサンダーも覚えていた。バドリスが姿を消す前に、自家用の宇宙艇とその管理人工知能につけていた名前だ。

床に穴が開き、台に乗った手芸用の丸い針刺しが現れる。上には色とりどりの待ち針が並んで刺さっていた。針の部分は鋭く銀色の金属。頭の部分が小さいながらも一本ずつ異なる種類の花の形になった、おそろしく精密な細工の待ち針だ。

「裁縫道具があることが意外か？　牝奴隷どもに縫わせたものを身に着けるのが、真の名家の後継者のたしなみだ」

「手芸なら、わたくしもやっているわ。屋敷で刺繍を見せたでしょう！」

スターサンダーの言葉を無視して、バドリスが針刺しから赤い花の待ち針を抜いた。少しのためらいもなく、無造作に左の膨張乳首の側面に突き刺した。スターサンダーから見れば、ピンクの肉筒の左側から入った針が、貫通して反対の右側から飛び出す。

「あああああああっっ！」

間を置かず右の乳首に、今度は黄色い花の待ち針を、上から下へと貫き通した。

「あっおおおおうううう！」

目に映っている自分の胸は、激痛をイメージさせる凄惨な状態だ。脳内で視覚に沿った苦痛が生成されそうになるが、串刺しにされた乳首で爆発する奇烈な快感が幻想を消し飛ばした。女体の敏感な部位を傷つけられたからこそ、三匹の寄生生物に逆転させられた感覚は、壮絶な肉の悦びをあふれさせた。

三人の女に押さえつけられた半裸身が、普段は自由に操っている高圧電流を通されたようにビクンッと跳ねた。

「はあああああ――――ああ、イクッ!!」

意志の力では止められない屈服の言葉が喉から飛び出し、跳ねる巨乳の先端で左右二本の待ち針が踊り、赤と黄の花がヒラヒラと舞い、銀の金属がキラキラと光る。くねる下半身では、女性器から女蜜が、肛門から尻蜜が湧き出て、ピシャッと床を鳴らした。

「イクうう！　胸がイッちゃふうううううッッ!!」

「おお、傷が！」

責めている八ドリスも目を見張った。スターサンダーが絶頂を叫ぶと同時に、乳房の間、左右の脇腹、二の腕、太腿に開いた傷がひとりでに閉じて、皮膚がくっついていく。傷跡はどこにも残らず、ただ肌に流れる血だけが一瞬前まで切り傷が存在したことを証明していた。針が貫通したままの二つの乳首だけは、治癒がはじまらず、血と快感を流しつづけている。

「こいつは凄いぞ。イケば傷が治るのか。便利な身体になったな。これならレイをいくら壊しても大丈夫かもしれん。さっそく楽しい実験だ」

床に置いた剣が再び握られる。

「やめて！　狂っているわ！」

叫ぶスターサンダーのM字開脚する右の内腿の腿径部に、切っ先が突き刺さった。

「くふうっ！」

鋭い快感が噴き上がり、新たな鮮血が流出する。

「あっひいいいっ！」

さらに左の内腿にも、同じ残虐な行為がくりかえされる。

「ほっおおおうっ！」

新たな二つの傷から強烈な快楽の電撃が発して、スターサンダーの全身を灼けるように痺れさせた。

「さあ、また針でイケ！　イッて傷を治してみろ！」

三本目の紫の花の待ち針が、クリトリスの先端に垂直に突き下ろされた。女の神経が凝集した一点に、銀の針が深々と刺さる。

「イクッ!!」

甲高い声をほとばしらせて、スターサンダーの全身が硬直した。体内を吹き荒れる異常すぎる快感に痛れて、筋肉がまったく動かなくなり、声も出せなくなる。高く勃起する肉芽の先端で、紫の小さな花が激しく振動した。

充満する愉悦に溺れ、開ききった膣の奥から愛液が大量に噴出して、憎むべき異母兄のペニスへ注いでしまう。花蜜だけでなく、肛門も内側からの圧力に押されて広がり、甘い香りがついた腸液が奔流（ほんりゅう）となって床を濡らしていく。

自分の身体の変化を、視覚ではなく触覚で感じ取った。両腿の傷がたちまちふさがり、筋肉繊維も血管も神経もつながって、完全に回復していく。不思議なことに、体内から滅った血液の量すら、もとにもどっているのがわかる。

「……はあああ……あうう……んんん……」

全身の硬直が解けて、逆に身体が蕩けた。左右の乳首と陰核に刺さる針以外には嗜虐の痕跡はなくなったが、身体中にどっしりと快感の余韻が残っている。

消えた傷の余韻だけではなく、串刺しにされたままの三本の肉突起は、今もズキズキと愉楽のパルスを放っていた。三か所の喜悦の波に乗って、降りかけたエクスタシーがまた小刻みにぶりかえしてくる。

「……あっ、イク……んん、またイッちゃう……はう、イクイク……」

「ははははは。いいぞ！　今のレイは最高に淫らで、最低に不様で情けない牝奴隷だぞ。シャウナの名門オルネ家を乗っ取ろうとした汚らわしい未開人にふさわしい醜態だ！」

筋骨隆々たる全裸をのけぞらせて大笑しながら、バドリスが針刺しを手にして、待ち針を次々と左右の乳房に刺していった。

「ひっ、あっ、はう、おううううあああ……」

巨乳全体が大きな針刺しと化して、赤、青、黄、緑、桃、紫、白の待ち針の頭の花が咲き乱れる。ひとつひとつの花の下で快感の震源が生まれて、胸全体が大きな悦楽の渦の中心となった。

「わたくしの胸が、むあああ、おっ、おかしくなるうう！」

スターサンダーの激しい身悶えに合わせて、刺された針のまわりからにじみ出た血が、乳房の球面を朱に染めていく。百花繚乱の待ち針に飾りたてられ、自身の血液に濡れる巨乳は、スターサンダー自身の目にも美しく、そして異質な魔の花園に映った。

「ははははは！　汚い未開人をきれいに装飾してやったぞ。レイ、感謝しろ。これから腹の中も白く飾ってやる。俺の精液でな！」

バドリスが両腕でスターサンダーの左右の脚を抱えて、たぎり勃つ肉槍を膣口へ突きつける。

「わたくしたちは兄弟よ！　ひあああっ！」

針と同じように、無造作に亀頭が膣口に突き入れられた。身体が裂けるかと危惧したグルングヤラの長大な猛獣のシンボルに比べれば、バドリスのモノはごく普通のサイズかもしれない。だが勇き起こる快感は段違いだ。

極悪非道の宇宙奴隷商人でさえも恐れる三元のワーストワーム同時寄生によって作り替えられた身体は、苦痛を快感に変えるだけでなく、普通の男根の挿入を快感の大嵐に成長させた。

「はひいいいっ！　あっくああああ！　はおお――おおおっ！」

「ははは、どうだ、レイ！　どうだっ！　どうだと言ってるんだっ！」

何度も確認の言葉を口にしながら、バドリスは自分勝手な動きをくりかえす。異母妹を自分のペニスをしごくための淫具としかあつかっていないことは、スターサンダーにもよくわかる。

（それなのに、気持ちいい！　ああああ、最悪の、最低の、兄なのに、気持ちよくてたまらないッ！）

「あおうう！　削れるわ！　わたくしを削られるう！」

亀頭が一往復するたびに膣肉が掻き乱されるだけでなく、自分の人間として重要な部分がゴリゴリと容赦なく削り取られて、バドリスに奪われる思いがする。欠落した部分には、どろりとした甘美なもので埋められていくようだ。

「あっ、あむ、んんん……」

薄けたよがり声をあげる口を、美里のキスでふさがれた。長い舌が喉の奥に潜りこみ、粘膜を舐めまわされながら、大量の濃密な唾液を流しこまれる。

左の胸の前に環奈が身を乗り出してきて、赤い花の待ち針が刺さったままの乳首を舐めまわしはじめた。肉筒に沿って流れ落ちる涎が、血と混じり合う。

黄色い待ち針が刺さる右の肉筒を、梨花の舌がつつき、粘つく唾液をかけた。

二人の舌が肉筒を舐めながら待ち針の花を何度もつつくと、乳首を貫く針の角度が変わり、新たな悦びを開かせた。さらに人差し指で乳肉に刺さるたくさんの待ち針の花を次々と弾いて、流血を増量させる。

「んっ、んんんっ、むうううっ！」

（消される！）

暴れ狂う悦楽の中でスターサンダーの直感が告げた。バドリスに射精されたら、自分は最大限の絶頂を迎える。そのときに自分の本来の意志は、歓喜の大渦に呑まれて消え失せるだろう。美里、環奈、梨花のように記憶は残り、人格は存続しても、それは別人だ。命令されることを待ち望み、命令に従う悦びに溺れ、それ以外のことは興味を示さない、もはや人間とは言えないものになってしまう。

脳内を巡る八ニックに駆られて、必死に逃れようとしても、男根を突き入れるバドリスの腕に抱えられた両脚を動かせない。上体をかこむ三人の女たちの手を振りほどけない。相手の腕力が強いからではなく、全身を快楽に侵されて、まともに手足を使うことすらで

きなかった。
（逃げられない！　あああ、消される！　わたくしが消えてしまうっ！）
「出すぞ、レイ！　俺の精液でレイの膣を満たしてやる！　心から感謝して果てろっ！」
パドリスの強化した肉体が、ひときわ強く腰を突き上げた。亀頭が膣の最奥を叩き、衝撃でスターサンダーの下半身が床から浮き上がる。
「レイ！　喰らえっ！」
宙に浮くスターサンダーの体内で、鈴口から精液が噴出した。異母兄の男汁が猛烈な勢いで身体中に浸透していく。
「イクッ!!」
意識が飛び、自分が消えていく。
「イクッッ!!」
消える。
「イックううううう――――――――うううッッ!!」

消える。
絶望とあきらめが意識を支配しようとしたとき、パドリスの声が聞こえた。
「ははははは。レイの仲間のサンダークラップスにも、レイの身体からワーストワームを寄生させてやる。今度はレイが新たな牝奴隷の母になるんだ」
（だめ）
「その次はエミだ。レイの母親も牝奴隷にしてやる！」
（だめ！）
「エミとレイ、母娘を並べて犯してやる！　その哀れな姿を全銀河に中継してやる！」
（だめっ！）
「その前に、レイがどこまでの傷に耐えられるのか、テストしてやるぞ！」
床に落ちたスターサンダーを目がけて、パドリスが剣を振り上げた。切っ先はまっすぐに腹へ向けられている。
「腹から背中まで串刺しにしても、ひとりでに治るかな！」
「だめえええええええええええええええええええっ！」
絶叫とともに、横たわるスターサンダーの胸とクリトリスからすべての待ち針が弾け飛び、針の刺し傷が一瞬で治癒した。
そして全身から黒い稲妻があふれた。

第七章　黒い宇宙

ブラックマルチバース

「第二次変異？」（セカンドモディフィケーション）

幼いレイ・オルは主治医にたずねた。

ようやく自分のミュータント能力を意志でコントロールできるようになり、定期検診を受けているときに、医者が言った。

「セカンドモディフィケーションに気をつけなさい」

主治医は魅力的な笑顔と真摯な低音の声で説明してくれた。ミュータント能力は不安定で、自由にコントロールできるようになったと見えても、なにかのきっかけで能力が変化することがある。たとえば以前に診たミュータントの患者は、大人になってからある寄生虫が体内に入ったことがきっかけで、能力が大きく変化して、甚大な被害を出す暴走をしてしまったという。

親身に見守ってくれた主治医への淡い恋心とともに、幼き日の記憶を、スターサンダーは思い起こしていた。

なぜなら、今、このとき、自分はセカンドモディフィケーションの真っ最中。

今まで自分が身体から発する電気は、どこから来ているのか、自分でもわからなかった。やっとわかった。この宇宙とは別の次元のエネルギーの一部が、自分の身体を通して電気として現れていたのだ。

今は、電気以外の未知なるエネルギーも呼べる。

床に横たわる身体から漆黒の稲妻が何本も放たれ、広い室内を駆け巡り、反転して、獲物を狙う未知なる宇宙生物のごとくバドリスに集中する。牝奴隷の突然の異変に、剣を持ったまま呆然としている全裸男が黒い稲妻に撃たれた。

「ぐわあああっ！」

バドリスが数メートルも跳ね飛ばされ、床に叩きつけられて、ごろごろと転がった。全裸の皮膚の三分の二以上が、石油に汚染された海鳥みたいにねっとりした黒色に染まっている。

「な、なんなんだ、これは……」

黒ずんだ喉と唇からこぼれる声は、か細く震えている。立ち上がろうとしても、黒くなった筋肉に力が入らない。そして猛烈に寒い。まるで全身が氷の塊に包まれて冷えきっているように、身体がガチガチに硬くなって、まともに動かせなかった。このまま凍死するのではないかと恐ろしくなる。

「なにが、起きたんだ……」

視界に近づいてくる異母妹の姿が入った。今も全身から放たれる黒い稲妻が、蛇の群れのように周囲の空中をうねり、シャウナの神話に伝わる暗黒の母神ヨーゴーズのようにおどろおどろしい。バドリスは幼いころに、毒大蛇の群れを眷族とする暗黒母神の恐怖譚を聞かされて、夜のトイレに行けずに、何度もおねしょをした。

「ど、どうして、力を使える……俺が、電気を、消しているのに……」

シャウナの数々の書物のイラストに描かれるヨーゴーズそっくりに、スターサンダーは黒い稲妻の一本を右手にまとわりつかせて、見る者を畏怖させる冷ややかな怒りを浮かべた。

「わたくしが出しているのは電気ではないわ。なんだと聞かれても困るけれど、異次元宇宙から来る未知のエネルギーよ。あなたが同時に三匹ものワームを寄生させたから、セカンドモディフィケーションを起こして、こんなことができるようになってしまったわ。おそらく、あなたはしばらくまとも動けないわね」

「あなたじゃない！　バドリス兄さんと呼べ！」

スターサンダーは憤怒に燃えながら、表情はいっそう冷たくなっていく。

「ああ、わたくしは三匹の寄生生物のせいで、おかしくなっているに違いないわ。スーパーヒーローなのに、この手でおまえを殺したくてしかたがない」

「バドリス兄さんと呼べえええっ！」

「どんなふうに廃棄されたいのかしら。ええ、ゴミクズ野郎」

「ぐあああああっ、シュニ、プランBだ！」

バドリスのわめき声に応えて、床のあちこちに穴が開き、多数のゴツゴツしたシルエットがせり上がってくる。

「こんなものまで用意していたなんて」

スターサンダーは身構え、黒い稲妻を身体の周囲にめぐらせる。

五十体もの集団で包囲したのは、高さが二メートル余りの見慣れたロボットだ。銀河でも有名なメーカーの戦闘用ロボットで、シャウナの警察や軍隊でも多数採用されていた。別の惑星での戦争を伝えるニュースでも、塗装が違うだけの同じロボット同士が戦っている。

威圧感を与えるために絶妙にデザインされた武骨な姿の両腕が、様々なタイプの武器を構えた。

「未開人をぶっ殺せ！」

バドリスの号令一下、銃口からいっせいにエネルギーや銃弾が放たれる。

だがスターサンダーの周囲に轟く黒い稲妻に触れたエネルギーはすべて霧散霧消した。銃弾も残らずスピードを失い、床に落下してバラバラと雹のような音をたてる。

スターサンダーは自分の意志の通りに動く黒い稲妻がしていることを理解した。

（触れたものからエネルギーを奪い取り、異次元へと送っているのね。銃弾が止まって落ちたのも、運動エネルギーを奪っているからだわ。でもバドリスの身体が黒くなったのは、どうしてかしら？）

ロボットたちは、バドリスと違って恐怖を知らなかった。しかしターゲットが使う未知の武器を前にして、人工知能が判断を下せないでいる。

そのわずかな間に、スターサンダーは防御に使っていた黒い稲妻を解放した。黒い稲妻の群れが戦闘ロボットたちの間を飛びまわり、次々とエネルギーを吸いつくす。自分の肉体を通して、エネルギーが別の宇宙へと転送されていくのを、不思議な心地よさとして感じる。

特殊合金の胴体が黒く染まり、ロボットの巨躯が機能を停止して、次々と転倒した。やすやすと戦闘ロボット軍団を全滅させた後に、スターサンダーは眉をひそめる。

「これがプランBなの？」

バドリスが黒く染まった顔を痛々しく引きつらせた。笑い顔を作っているようだ。

「もちろん違うぞ。ロボットはただの目くらましだ。プランBとは、地球に蔓延しているロッテンピースウイルスの最大活性化だ。コズミックピースキーパーはお優しいから、住民が絶滅しないように何年もかけて文明を崩壊させる計画だが、俺はたった今、すべての地球人を一気に痴呆化してやったぞ。今ごろ地球がどうなっているのか、想像するだけで笑える、ええっ⁉」

バドリスの目の前の床を突き破って、大きな機械の塊が出現した。

何トンもありそうな機械を両手で持ち上げて、フレアが空中に浮上してくる。

フレアのコスチュームは破り取られて、端切れが身体にまとわりついている状態だった。大きな胸も尻も女性器も派手に露出して、いろんなもので汚されている酷いありさまだが、顔は凛としたスーパーヒーローそのもの。

フレアが開けた大穴から、飛行するローズデバイスと、背中にしがみついたオセロットが出てきた。エメラルドグリーンのアーマーとネコ科の猛獣の顔や身体にも、白い粘液やローションがべったりと付着している。

フレアは頭上に持つ機械を床に放り投げて大音響を響かせると、あらわな胸を張って宣告した。

「ロッテンピースウイルスを操る装置はとっくにローズデバイスが機能を止めて、わたしがぶっ壊したぞ！　エクストリームストライカーズが教えてくれたから、簡単に見つけられた」

「馬鹿な！　あいつらが、俺を裏切るわけがない！」

「おまえが地球人を滅ぼすつもりだと教えてやったら、三人ともあっさり裏切ってくれたよ。逮捕した後に、わたしたちが裁判で有利な証言をしてやるという条件付きだけどな」

「未開人のカスどもがあ！」

床に横たわったまま歯ぎしりするバドリスに、サンダークラップスが迫る。

スターサンダーが冷徹な声をぶつけた。

「残念だけど殺しはしない。シャウナでコズミックピースキーパーや人身売買組織の情報をしゃべる義務がある。黙秘権は認めない。どんな方法を使っても、洗いざらい話させてやるから」

スターサンダーの手が異母兄に触れようとしたときに、床に穴が開いた。バドリスが、安全なエレベーター方式ではなく、ダストシュートのように床下に落下して消える。

ローズデバイスが悲鳴に近い声をあげた。

「すみません。宇宙船のすべてを掌握できていませんでした！」

月と宇宙空間を映す天井全面のモニターに、小型の空飛ぶ円盤が現れた。室内にバドリスの笑い声が大音量で響く。

「ははは！　俺が未開人の手に落ちるものか！　俺の身体は動かなくとも、俺のシュニが安全に脱出させてくれる。いったん撤退した後に、さらに強力なコズミックピースキーパーの軍勢を率いて、必ず地球を滅ぼしてやるぞ！　ははははははは、うえええっ⁉」

バドリスの声がいきなりひっくり返った。

円盤の進行方向の星々が揺らいだと思うと、立ち ふさがるように白い物体が出現する。鳥が翼を広げた姿に似た形状で、人工物なのは間違いない。比較するもののない宇宙空間なので具体的なサイズは不明だが、バドリスが乗る円盤よりもはるかに大きいのは確実だ。スターサンダーが首をかしげる。

「見たことのない宇宙船だわ。月の近くにまで、未知の種族の宇宙船が来ているなんて知らなかった」

白い鳥型宇宙船のなめらかな表面の一画に穴が開き、なにかが飛び出した。

画面の奥の空間から バドリスの円盤に向かってまっすぐに飛んでくるものの正体は、すぐにわかった。

人間だ。

短い黒髪の若い美女。

宇宙空間を飛びながら、宇宙服を着ていない。

着ているのは、腰に透明なフリル（リリー）がついた黄色いボディスーツ。

その豊かに隆起した胸には、白い百合の花が描かれている。

サンダークラップスの四人が、同時にひとつの名前を叫んだ。

「リリー・ダイナモ！」

それから四人はいっせいに口々にしゃべった。

「リリー・ダイナモはしばらく前に殉職したわ！」

「どうして、生きてるんだ？」

「なんでリリー・ダイナモが宇宙に？」

「リリー・ダイナモさんは宇宙空間が平気な人だったんですか？」

リリー・ダイナモは千葉県を中心に活躍していた女性スーパーヒーローだった。かわいい外見に似合わず、驚異の腕力と、身体の周囲に作るエネルギーの壁を駆使して犯罪者と戦った。

人気のあるヒーローだったが、『カオスアリーナ』として知られる犯罪組織との闘いで殺されたのだ。その遺体はオフピート犯罪者によって、ロケ中のテレビの生放送でさらされ、日本中の人間が見た。遺体は警察で調べられ、後に日本最高のヒーローチームの『ジャスティスサーカス』に引き取られた。ジャスティスサーカスの発表によれば、生前の本人の希望により密葬がおこなわれたという。

そのはずなのに仰天する四人が見つめるなかで、リリー・ダイナモは円盤に体当たりして止めると、両手でつかまえて押しもどしてくる。室内には今度はリリー・ダイナモの声が響いた。ヘッドセットのマイクを通して話しているようだ。

「わたしの宇宙船の探知システムで、偶然サンダークラップスの状況を知って、出しゃばりました。今からバドリスという人を連れて、そっちの宇宙船へ行きます」

「えええええ――――っ⁉」

サンダークラップスはただ間の抜けた声をあげるのみだった。

☆

あらためてバドリスは捕らえられ、スターサンダーが超光速通信で連絡した惑星シャウナの警察に渡された。バドリスの告白をもとに、コズミックピースキーパーと奴隷売買組織の捜査が執行されるだろう。

警察とともに来た医療団によって、地球に蔓延したロッテンピースウイルスは地球人に知られないまま撲滅された。

ワーストワームに寄生されたスターサンダーと美里、璃奈、梨花の四人は、医者の手で治療されて、本来の身体にもどり、自由な意志を回復した。ワーストワームを除去されたスターサンダーは、セカンドモディフィケーションで得た能力を失って、もとの電気を操

るだけになった。
「あのときは助かったけれど、正直なところ、あんな正体不明のわけのわからない力はいらない。なくなってホッとしているわ」
と、いうのが本人の談だ。
美里たち三人はいったん日本へ下り、遠くから年齢を重ねた家族を見た。これまでの体験を考えると、再会する気持ちにはなれなかった。
不幸な形だったとはいえ宇宙を巡って生きてきた女たちは、今さら別人のふりをして地球にとどまるのは窮屈だと言い、あらためて宇宙へ旅立っていった。まずはシャウナへ行き、恵美に会うつもりだ。
こうして宇宙からの侵略があったことは地球人には隠されたまま、事件は収束したのだった。
そして千葉県庁舎の前で、記者会見が開かれた。
死から帰還したリリー・ダイナモのお披露目だ。
おなじみのかわいいヒーローコスチュームのリリー・ダイナモの後ろには、後見人という様子でキャプテン・スカイの長身が立っている。
キャプテンは日本最初のスーパーヒーロー。ジャスティスサーカスの創設者であり、長年第一線で活躍してきた。ある事件でオフピート能力を失い、現役を引退したが、今も日本のヒーローたちの精神的指導者として活動している。
リリー・ダイナモは多数の報道陣や一般の人々を前に語った。
「皆さんもご存知の通り、わたしは不覚を取り、敗北して、致命傷を受けました。自分でも死んだと思いました。ですが、わたし自身も自覚していなかったオフピート能力が発動して、仮死状態になって生命を守ることができました。
仮死状態のわたしは、ジャスティスサーカス本部で蘇生しました。とはいえ活動できるまでには長いリハビリを必要としたので、自分とわたしの関係者の身を護るために死を偽装したまま、ジャスティスサーカス本部で訓練して、ようやくもどってきました。ご心配をかけて、申し訳ありません」
会見に集まった大勢の人々の隅に、サンダークラップスの四人が素顔で混じっていた。
ベルは双眼鏡を目に当てて、小声で囁いた。
「また嘘をつかなくちゃならないとは、スーパーヒーローは難儀だねえ」
リリー・ダイナモの言葉を真剣に聞いている燦と静子は、無言でうなずく。
「やっぱり秘密の正体は護らなくてはね」
燦は自分のかたわらにいる車椅子の女性にそっと声をかけ、千葉市内のごく普通の家で初対面したリリー・ダイナモの素顔に驚いたときを思い起こした。
リリー・ダイナモの本名は百合丘知美。
高校生のときに事故で下半身不随になり、車椅子が必要になった二十代の女性だった。
知美は偶然、閉じた異空間に封印されていた宇宙人の住居らしき遺跡を発見した。その遺跡にあった携帯通信機を通じて、月の軌道に隠されていた無人の宇宙船と交信ができた。宇宙船は西暦の十六世紀ごろに地球に来て、乗員たちが今の千葉県に住居を築いたが、数年で放置されたらしい。宇宙人がいなくなった理由は、知美にもわからない。
通信機の特殊なシステムを作動させると、宇宙船に多数保管されているバイオテクノロジーで造られた意志のない生体ロボットが、一瞬で転送されてくる。知美は精神を生体ロボットにリンクさせて、離れた場所からリモートコントロールができる。
リリー・ダイナモは、車椅子の若い女性が精神リンクで動かすロボットだった。死体を警察が検視しても、普通の人間と判断したほど精巧な。
自分が操る生体ロボットを役立てたくて、知美はイベントで千葉に来ていたキャプテン・スカイに相談した。キャプテンから指導を受けて、スーパーヒーローのリリー・ダイナモとしてデビューしたのだ。
生体ロボットのリリー・ダイナモが砕されても、知美の身体にダメージはない。しかしロボットを通して死を体験したショックは大きく、ヒーロー活動を再開するまでには時間を要した。
記者会見の言葉はつづいている。
「わたしが生きていられるのは、一度きりの奇跡だと思っています。だからこそよりよいスーパーヒーローでありたいと決意しています」
拍手と歓声がどっと湧いた。
その後しばらく質疑応答をしてから、リリー・ダイナモとキャプテン・スカイはジャスティスサーカスの専用車に乗り、県庁から離れた。
車椅子の知美が大きく息をつき、燦に笑いかける。
「リリー・ダイナモは宇宙船に帰還させました。今は、車の中はキャプテン・スカイだけです」
両手を頭上に上げて、大きく背筋を伸ばす。
「ああ、緊張した。こういうマスコミの相手をするのって、何回やっても固くなっちゃう」
サンダークラップスの四人も口々に賛同した。
燦は腕を組み、しみじみと語る。
「マスコミの相手をしないですむのなら、もっと気楽なのになあ」
静子は自分がマイクと力メラの列の前に立っていたようにこわばった顔をゆるめた。
「あたしはアーマーで全身を隠しているのに、なぜだかガチガチになります。アーマーの中が冷や汗でベトベトになっちゃって」
知美もそうそうという顔になる。
「わたしなんて、本当の自分は別の場所にいるのよ。リリー・ダイナモの目を通して自分を見るのは、今でも変な気分」
燦は千葉の町をながめて、ほがらかに言った。
「さあて、せっかく知美さんと友達になったのだから、知美さんのおすすめのところで食事にしましょう。わたくしが奢るから安心してね」
「さすが銀河のお嬢様！　太っ腹！」
ベルの声に、全員が笑った。

Illustration by 緑木邑